

ヨークシンシティでオークションすっぞ！

KTケイティ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヨークシンシティへ、オーケションをしにやつて来た悟空たち4人

(悟空、ベジータ、悟天、トランクス)

目的はゲームソフト『グリードアイランド』

幻影旅団も絡んだ複雑な様相を呈してきたヨークシンシティ

無事に悟空たちは目当てのものを手に入れられるのか!?

〈前回のお話はこちら〉

<https://syosetu.org/novel/152392/>

②『ベジータの天空闘技場 攻略』

〈最初のお話はこちら〉

<https://syosetu.org/novel/151315/>

①『悟空とベジータのハンター試験?』

〈サイドストーリーはこちら〉

<https://syosetu.org/novel/151289/>

『悟飯のハンター試験?』

目 次

事前設定資料集

【57】ヨークシンティ到着	"9月1日"	1
【58】ヒソカの企み		
【59】目標はグリードアイランド		
【60】悟空、再戦		
【61】ヒソカは手に入る		
【62】グリードアイランドを知る		
【63】オーケーション?		
【64】地下競売とオーケーション	"9月2日"	
【65】悟空たちのオーケーション		
【66】念を学び始める		
【67】悟空の水見式		
【68】オーケション会場襲撃のあと		
【69】悟天とトランクスの水見式		
【70】ウボオーギンの余裕		
【71】荒野で動きあり		
【72】見せつけるウボオーギンのその力		
【73】陰獣到着		
【74】マイティマスクV S ウボオーギン		
【75】幻影旅団V S 陰獣		
【76】追う		
【77】幻影旅団V S 新たな陰獣		
【78】油断大敵の男		

〔79〕光の玉

〔80〕心のすれ違い

〔81〕気づかぬは1人だけ

〔82〕囚われの男

〔83〕クラピカV Sウボオーギン（前半）

〔84〕クラピカV Sウボオーギン（中盤）

〔85〕クラピカV Sウボオーギン（後半）

〔86〕地下競売への誘い “9月3日”

〔87〕条件付きかくれんぼ？

〔88〕掲示板

〔89〕殺し屋集合

〔90〕尾行開始！

〔91〕旅団アジト

〔92〕ノブナガとウーロン

〔93〕ウボオーとヒソカ

〔94〕その男は？

〔95〕カストロ激突

〔96〕桃白白とイルミ

〔97〕クラピカとの再会

〔98〕旅団を逃がすな

〔99〕確保と幕引き

〔100〕そして誰もいなくなつた “9月4日”

事前設定資料集

前作、前々作などが長くて読むのが大変だと思われるので、要約作りました。

前作ネタバレが思いつきり書いてあるので、ちゃんと読みたい方は、①の『悟空とベジータのハンター試験?』から読んで見てください。

〈最初のお話はこちら〉

<https://syosetu.org/novel/151315/>

①『悟空とベジータのハンター試験?』

〈前回のお話はこちら〉

<https://syosetu.org/novel/152392/>

②『ベジータの天空闘技場 攻略』

〈サイドストーリーはこちら〉

<https://syosetu.org/novel/151289/>

『悟飯のハンター試験?』

とにかく続きからでいいから読みたい
という方は下へ

← ← ← ← ←

← ←

〈要約〉

①『悟空とベジータのハンター試験?』

<https://syosetu.org/novel/1513>

15／
ハンター試験に挑んだ悟空とベジータ。

ブルマに戦闘力を制御するリミッターを付けられて、パワーの出せない二人。

難敵ヒソカに破れながらも、辛くもベジータだけは合格。禍根を残してハンター試験は終了した。

②『ベジータの天空闘技場 攻略』

<https://syosetu.org/novel/1523>

92／
ヒソカへのリベンジの為、天空闘技場へやつてきたベジータ。

ゴン、キルアと共に念を学びながら200階へ。

ヒソカと戦うも、リベンジならず。

次のヨークシンシティでの再戦を目指す。

〈設定集〉

・リミッター

戦闘力を制限するブルマの作品

・気

ゴン、キルア、クラピカ、レオリオはほんの少しだけ使える。悟空にハンター試験中に習つたため。

・念

気の劣化版と言われているが、使い方によつては強くなることも。

・戦闘力（Z 戦士は〇 内だとリミッター付けた数値）

通常ベジータ ⇒ (20 前後)

気を入れたベジータ ⇒ (200 ~ 300 前後)

スーパー Saiyans ベジータ ⇒ (1000 前後)

通常悟空 ⇒ (20 前後)

気を入れた悟空 ⇒ (200 ~ 300 前後)

スーパー Saiyans 悟空 ⇒ (1000 前後)

通常ヒソカ ⇒ 1000 前後

念使用時ヒソカ ⇒ 1000 前後

通常カストロ ⇒ 1000 前後

念使用時カストロ ⇒ 1000 前後

通常ゴン ⇒ 300 前後

念使用時ゴン ⇒ 200 前後

通常ギルア ⇒ 450 前後

念使用時ギルア ⇒ 280 前後

クラピカやレオリオは今後出てくるので、この資料集には入つてしま
せん。

リミッターを付けると、スーパー Saiyans の上にはなれません。
その他、戦闘力などの細かい数値は省きます。

ぜひ、最初の作品か、前作の『ベジータの天空闘技場攻略』からお
読み下さい。

〈前回のお話はこちら〉

<https://syosetu.org/novel/1523>

92 /
②『ベジータの天空闘技場 攻略』

〈最初のお話はこちら〉

<https://syosetu.org/novel/1513>

①『悟空とベジータのハンター試験?』

〈サイドストーリーはこちら〉

https://syosetu.org/novel/1512
89 /

『悟飯のハンター試験?』

【57】ヨークシンシティ到着　〃9月1日〃

9月1日

「ヨークシンシティ 露天街」

「やつと着いたね」

「ゴンの家、クジラ島が遠すぎるんだよ」

ゴンとキルアは、クラピカ達との約束通りヨークシンシティにやつてきていた

天空闘技場でベジータが帰ったあと、ゴンとキルアはカストロと共にフロアマスターを目指して戦つた

カストロはすぐにフロアマスターとなつたが、師であるヤムチャと連絡が取れず、意氣消沈し、しばらくして天空闘技場を去つていつたゴンとキルアも同じくして、フロアマスターの一歩手前で天空闘技場を去つた

しばらく帰つてなかつたゴンの実家に、キルアを連れて行くためだつた

そして、ゴンの実家であるクジラ島で、母親代わりのミトから”ジンからの預り物”を受け取つていた

「それにしてもなんでゲームなんだろ？」

ゴンは首をかしげながら歩く

「そこだよなあ、ほんとわかんねえ。ミルキの奴もわかんねえんだから、多分オレたちが考えてもムリムリ」

ヨークシンの出店が並ぶ市場を練り歩く

「ま、とにかく50億ジェニーだかなんだか知らないけど、バカ高くてこのままじや買えないってのだけは確かだな」

「二人で8億だもんね…」

「あれ？ もうちよいなかつた？」

「残りはベジータさんの分だよ」

「そういうやそつか。とりあえず携帯買わないと連絡も取れないな」

目先の目標は携帯だと、キルアが言いながら露天を覗く

そこへ後ろから声がかかる

「そつちじやなくてこつちにしたほうがいいぜ」

バツ、と振り向く二人

「レオリオ!!」

再会の喜びを味わいながら、レオリオの値切りで携帯を購入した二人

「…そういうベジータさんの連絡先、知らないんだった」
携帯を買つても連絡が取れないことに気づいた二人は、とりあえず
レオリオと共に宿泊先の確保やこれからのこと話をしながら中心街
へと進んで行つた

「ヨークシンシティ 入口」
シユタツ

4人が降り立つ

「なんか騒がしそうなとこだな」

「ふん、お祭り気分とはおめでたいやつらだぜ」

そう、悟空とベジータがヨークシンへやつてきていた

「パパ、でも楽しそうだよ！」

「お父さん、ボクあつち見てきていい？」

そして、トランクスと悟天も一緒に

ベジータは、ヒソカとの再戦を求めて

トランクスはブルマから言われてベジータが連れてきていた

そしてトランクスに誘われた悟天

その悟天の保護者としてチチに言われてついてきた悟空

「んで、どうすんだこれから？」

悟空がベジータに尋ねる

「クラピカを探せばヒソカの居場所がわかるはずだ。クラピカを探すにはまずはゴンかキルアを探すのが早いか」

「おめえヒソカに会いにここまで来たんか!?」

「う、うるさい！理由があるんだ！」

「まあいいけど、オラもゴンたちには会ってえからな」

そんな二人の会話を、トランクスと悟天は不思議そうに聞く

「パパ、ヒソカつて誰？」

「ゴンさんたちつて、お父さんが話してたハンター試験の人たちのこと？」

ベジータはトランクスには答えず、悟空が代わりに答える

「ヒソカつちゅうのはハンター試験のときにいた結構強えやつだ。ゴンたち、特にゴンとキルアはおめえたちと歳も近えから友達になれるかもな」

それを聞いた二人はワクワクしながら悟空たちのあとをついて、ヨークシンシティへと入つて行つた

「西の都 カプセルコー・ポレーション」

ピンポン ピンポン

「おーい」

ガチャ

「なによ朝っぱらから…、つてヤムチャじやない」

「ああ、すまない」

「どうしたのよ」

いつもの陽気な雰囲気とは違い、眞面目な顔のヤムチャ
「ここにウーロンいないよな？」

「ウーロン？ そう言えば最近ずっと見てないわね。どうしたの？」
「実は…」

ヤムチャはウーロンが居なくなつていることを話した

天空闘技場に一緒に居たこと、そしてそのあと見かけてないこと
よく亀仙人様のところにいるので、今回もそこにいるだろうと思つ
ていたのだが、久しぶりに亀仙人様のところへ行つたら、半年は見て
いないと言われて、ここへ探しに来たのだつた
「天空闘技場にまだいるとか？」

「いや、電話してもう確認したんだ」

フロアマスターの権利を剥奪されていたので、部屋の権利も消えてウーロンが住める場所などなかった

「うーん、でもあんたやパーアルみたいに空を飛んで帰つてくることができないでしょ？ 確か変身も5分くらいしか出来ないから鳥になつてもすぐ落ちるし」

「やつぱりあつちにいるか？」

「行きましょうヤムチャ様！」

悩むヤムチャを促すパーアル

「もし見かけたらすぐに連絡してあげるわよ」

「…すまない」

「あ、そう言えばいまヨークシンシティにベジータとトランクスが居るから、そつちに行く機会があつたらベジータにも聞いてみるといいわよ」

「ヨークシン…ありがとうございます！」

そしてヤムチャはプーアルを抱えて飛び立つた

（ヨークシンシティ 廃墟ビル街）

2つの影が廃墟と化したビルの間を歩いていた

「ほ、ほほ、本当にあの幻影旅団のどこに行くのかよ」

「もちろん、ボクも団員だから大丈夫◆」

ウーロンを引き連れてヨークシンへと入ったヒソカは、そのまま幻

影旅団の集合場所へと向かっていた

見えてきたのは一際崩れた廃ビル

階段の面影がある部分を登り、広々としたフロアに入る

「やあ◆」

ニコリと笑つて廃墟ビルのフロア内にいる11人に声をかける

その11人こそが幻影旅団

視線がヒソカと、その後ろにいるウーロンに刺さる

「…そいつ、なに？」

マチがなぜか嫌な顔をしながらウーロンを見る

「…ボクの…友達、かな？◆」クククツ

はぐらかしながら腰を下ろすヒソカ

そこに12人目の人影がスッと奥から現れる

「勝手に部外者を連れて来るからには理由があるんだろう、だよな？」

ヒソカ」

オールバツク姿の男が確認するようにヒソカへ問う

「そうそう、面白い能力持つてるんだ◆」

その言葉で更にウーロンへ視線が突き刺さる

（む、無理だ…死んじやう…）

青ざめるウーロンにオールバツク姿の男が問う

「そうか…ならばお前の能力、見せてくれ」

【58】ヒソカの企み

「ヨークシンシティ 市内」

「いねえなあ」

キヨロキヨロと辺りを見回しながらゴン達を探す悟空

「ちつ、流石に気を入れてないやつらの小さな気までは探せんか」

ベジータも悪態をつきながら歩く

「場所がわかつてたら気が小さくても探せんだけなあ」

そんなことを話ながら歩いていると、トランクスと悟天が戻ってくる

シユタツ シュタツ

「パパー！ 予約してきたよ！」

はい、とホテルまでの道が載った地図をベジータに渡す

「ねえ、お父さん遊んできていい？」

悟天が悟空の袖を引っ張る

「ああ、いいぞ。日が暮れる前までにはそのなんとかつちゅうホテルに戻るんだぞ」

「ベーチタクルホテルだよ」

「205号室と206号室ね」

悟天とトランクスが矢継ぎ早に説明し、今にも飛んでいきそうになる

「おい、力を出しすぎるなよ」

今度はベジータが忠告する

「大丈夫！ ちゃんとわかつてるよ！ ボクもパパと同じやつ着けてもらおうかなあ」

トランクスがベジータの腕を見る

「そう『言』えばお父さんも着けてるよね」

悟天も揃つて悟空の腕を見る

「なんだ？ 貴様もまだ着けていたのか」

「ときどき力んで物壊しちまうからチチが着けとけつてうるせえんだ」

そんなやり取りを待てなそうにウズウズする子供たち

「もう行くよ！」

「お父さん行つてきます！」

ドヒューネーン

「そいや飛ぶなつて言うの忘れてたな」

「ふん」

あつという間に消えていく2人を見送り、悟空とベジータはゴン達を探し始めた

（ヨークシンシティ 廃墟ビル街）

「どこへ行く？ ヒソカ」

「ちよつといいとこ◆」

団長クロロの問いに笑つて答えるヒソカ

「悪巧みか？」

「もちろん◆」

そんなヒソカを見て薄く笑いながらクロロは言う

「決行は明日、9月2日の夜だ」

「りょーかい◆」

そしてヒソカはビルから消えていく

（ヨークシンシティ 郊外）

「やつ◆」

「もう昼だぞ。午前中のはずだつたと思うが？」

ヒソカに向けて厳しい視線を飛ばすクラピカ

「なかなか抜け出す機会がなくてね◆」

「旅団の情報を教えてもらおう」

静かに問うクラピカ

「いいよ◆ボクの知つてゐる団員の能力を教えよう◆」
「旅団の動きについては?」

「そこは教えられない◆確実にボクだとバレちゃうから」
ふう、と一息つきながらクラピカが続けて尋ねる

「わかつた。団員の能力だけでいい。だがなぜ私に協力する」
「ボクの狙いは団長◆でもガードが堅くてね」

「…なるほど」

ヒソカの狙いがわかつたクラピカは頷く
(やつぱりキミで良かつたよ◆頭の回転が早い)

ククツ、と笑うヒソカ

「納得してもらえたようで何より◆」

そしてヒソカは話す
団員の能力を

【59】 目標はグリードアイランンド

「ネテロ会長 別荘」

「プルルルルル

「もしもし、ワシじや、ネテロじや」

『なーにー? 電話なんて珍しいじやない』

その相手はブルマ

「いやいや、礼くらい言つておかんとの」

そう言いながらネテロはある物を顔に装着する

『ああ、そのことね。いいわよそれくらい』

「それにしても凄いのぉ、相手の力がわかるとは便利なものじや』

ピピピッ

『でも気を付けた方がいいわよ。ベジータが言つてたけど、同じくら
いの戦闘力なら戦い方次第だー、とか』

そう言われて笑うネテロ

「ほつほつほつ、もちろんじやて。この歳になつてもいろんな発見が
ある、嬉しいもんじやて」

『喜ぶのはいいけど、壊れやすいから気を付けなさいね』

「うむ、予備のもう1つはちゃんと仕舞つてあるので大丈夫じや』

『それじやあまたね。——つと、忘れるところだつたわ』

急にトーンの変わつたブルマ

『そつちで、ウーロンつていうブタに似たやつが行方不明みたいなの
よ。もし見かけたら連絡くれる?』

「ふむ:聞いたことはないがの。情報が入つたらすぐ報せようかの』

『ありがと。あと、ヨークシンにベジータが行つてるからもし近いな
らベジータにも探すように伝えといてー』

そう言うとプツと電話を切るブルマ

「あ、相変わらず一方的じやの…」

呆れるネテロ

(ヨークシンまでは丸1日といったところかの。ちと遠いから…いつ
か)

ポリポリと頭をかきながら、顔に装着をした物を静かに外し、瞑想を始めた

「ヨークシンシティ 市内」

「んで、お前らが狙つてるってのが？」

「グリードアイランド！」

レオリオの問いに勢いよく2人同時に答えるゴンとキルア

「オレのオヤジの手掛けりがそのゲームにあると思うんだ」

「ゲームう？」

いぶかしむレオリオにキルアが説明を加える

「そー、50億ジエニーとか言うバカ高い金額してんの」

「そりやー難儀な額だな。他に情報ないのか？」

「んー、そう言えばまだあんま調べてなかつたね」

ゴンがキルアを見る

「ちょうど良い方法があるぜ。ゴン、ハンターライセンス持つてるよな？」

指でカードの形を作りながらキルアが尋ねる

「うん、これだよね」

「なるほど」

そのやり取りを見てすぐに頷くレオリオ

「レオリオはわかるみたいだね。そ、ハンター専用サイトなら情報が得られるはず」

「ならオレはその間に他の情報を探つておくさ。合流はベーチタクルホテルでな」

そう言つてレオリオは郊外へ向かつて行つた

「ああ、オレたちも調べたらすぐ行くよ。もう遅いし」

既に日も落ち、街頭にはデイナーに向かう人々が満ちていた

ゴンとキルアはそそくさとネットカフェに入り、ハンター専用サイ

トの閲覧を始めた

【60】悟空、再戦

「ヨークシンシティ ホテル一室」

「ここがオレ達がヨークシンでの拠点とするホテルだ」

目の下に楔状のアザがある男、ダルツォルネがクラピカたちに説明をする

「この部屋だけか？」

クラピカの問いにダルツォルネは続けて答える

「いや、この1つ下の階の部屋が予備としてある。また、地下にも特別な部屋がある。それより層はどこに居た!?」

「自由時間だつたはずだが? 交代要員も来ていた」

当然の権利だと答えるクラピカ

「自由時間だろうが交代要員がいようが、気を抜くことは許されんのだ」

ダルツォルネがクラピカに詰め寄る

「特別な部屋つて?」

そこに話を戻すように、目を大きく見開いた小柄の女性が問い合わせる

「センリツ、君は知らなくていいことだ」

そのダルツォルネの回答にクラピカは考えを巡らせる

(説明をしない、ということは…敵対する者を捕らえておく場所、そして恐らくは尋問などができる施設…)

「いいか、お前達はお嬢様の安全だけを考えておけばいいんだ! わかつたな!」

それだけを言うと、ダルツォルネは部屋を後にして行つた

「ヨークシンシティ 郊外」

「本当にこつちでいいんか?」

「知らん。貴様が地図を見たんだろう!」

「でも先に進んだのベジータだろ」

「貴様がオレ様の前を歩くからだ！」

不毛な言い争いをする悟空とベジータ

と、そこに声がかかる

「なんだ、キミも来たのか」

バツと振り向く2人

「ほう、貴様の方から会いに来るとはな」ニヤリ

「久しぶりだなー」

「いや、今回は本当に偶然◆」

おどけた感じで首を竦めるヒソカ

「偶然でもなんでもいい。オレ様と戦え」

構えをとるベジータ

「うーん、キミとはもう3回も戦つてたからね」

ちらり、と悟空を見るヒソカ

「んじゃオラとやつか」

につっこりと笑う悟空

「まあそれでもいいけど…」

「待て！オレ様が先だ！」

「なんだよベジータ。いいじやねえか。もう何度も戦つてんだろ？」

押し退け合う2人に呆れながらも、ヒソカは選ぶ

「じゃあキミで。そのあとベジータ、キミと戦つてあげるよ◆」

スウウ

静かに構えを取るヒソカ

「やることがあるのにこんなところで邪魔されるとボクでもイラッとするよ…」

そう言つた瞬間、ヒソカが動く

シユツ

「つと、あぶねえ」

トランプを避ける悟空

ヒソカの右手にはトランプが1枚

「流石に動きが良い◆」

「未来トランクスの剣みたいだな」

切れ味の良さ、で思い出す悟空

ヒュンヒュンヒュン

トランプを寸でのところで避けながら反撃の機会を窺う悟空

「うーん、キミたちは本当にやりにくい◆」

そう言うと今度は左手に無数のトランプを取り出す

バツ

「そんなもん上に投げてどうすんだ？」

目眩ましにもならない、と思つた瞬間

シユツバババババ!!!

悟空目掛けて次々とトランプが飛んで来る

「ちょ、超能力か!?」

慌てて避ける悟空

ピシッ ピシッ

避けているはずのトランプが悟空を微妙に切り裂く

(なんでだ? オラちゃんと避けてるはずなのに)

その間にも、悟空の周りにはトランプが飛び交う

勢いを増すトランプは悟空を中心に半径20mほどの球を作り、

次々に襲いかかる

「そろそろ狩るか」

ヒソカがジリっと動く

(ちつ、まだ気づかんのか)

ベジータは既に『凝』でそれを見ていた

ヒソカのトランプは悟空の体にバンジーガムによつて付けられて

いる

ベジータのイライラが限界に達しようとしたとき

「痛てえええええ!!」

悟空たちの後ろから叫び声が上がる

バツと振り向く悟空たち

(彼は確かレオリオオ…)

「あぶねえ！」

悟空の周りを飛んでいるトランプの球の半径内に入ってしまって
いたレオリオ

レオリオに向かつてトランプが飛ぶ
ガツ

近くにあつた柱に刺さつて止まる
だが他のトランプがまだ舞つている

一瞬の判断で下がる悟空

逆にヒソカは動く

「邪魔されるのは嫌なんだよね」

「待てヒソカ！殺すな！」

追い縋る悟空を無視して、トランプでレオリオに切りかかるヒソカ
ヒュツ、とレオリオの喉にトランプが吸い込まれる瞬間
シユン

悟空とヒソカが消えた

「…いま…悟空とヒソカがいたような…」

唚然とするレオリオ

「力力ロットのやつまたやりやがつて」

「あ！ベジータ！ベジータじゃないか！」

レオリオが切られた左肩を抑えながらベジータに近づく
「運が良いな、柱に助けられるとは」

「そういうやこの柱、なんでこんななんもないそこにポツンと刺さつて
んだ？」

斜めに刺さつた柱を不思議そうに眺めるレオリオ

「それよりベジータ、久しぶりなのにつれねえじやねえか」

「ふん、少し前までならちようど良かつたんだがな」

もう目的のヒソカを見つけてしまつた後ではレオリオ、そしてゴ
ン、キルア、クラピカに会つても意味がない

「ちょうど良いって…？」

「ふん、こつちのことだ」

「それよかゴンとキルアがベジータのこと探してたんだ。偶然にし
ちゃ上出来だ」

そう言つてベジータの肩を叩くレオリオ

そこへ

シユン

「ふひいー、危なかつた」

「おつ！悟空じやねえか！やつぱり見間違いじやなつた」

「おつす！レオリオ久しぶりだなあ」

嬉しそうに話す悟空

「待て！貴様ヒソカをどこへやつた!?」

「どこつて…」

【6-1】ヒソカは手に入れる

「ネテロ会長 別荘」

「な、なんでお主がここにおるんじや…？」

「…ボクが聞きたい方だと思うんだよね」

ヒソカはネテロのところへ飛ばされていた

（またやられたようだね…◆）

「一瞬、悟空が見えたような気がしたんじやが…」

「いいよ、それよりここはどこだい？」

「ワシの別荘じや。なんでお主達が知つておるんかのお」

いぶかしむネテロ

「ヨークシンシティ、に行きたいんだけど…。道はわかるかい？」◆

「ふむ、何かと『ヨークシン』を聞くの」

良いじやろう、と地図を見せて説明するネテロ

「ここから南東の方角に徒步で1日つてとこじやろうな」

「ギリギリ間に合う、かな◆」

2度目のマラソンをさせられるようで、少しイラつきを覚えるヒソカ

そのヒソカの目に、ネテロの机の上にある物が映る

「あれは…」

「そう言えばお主、ハンター試験の時に似たものを着けておつたの」

「いま思えば、なぜ?と疑問が湧いてくる

「じいさん、それ、貰えないかい?」

スカウターを指して尋ねるヒソカ

「うーむ…」

ポリポリと頭をかくネテロ

「そうじやのお…お主が、ワシの頼みを無条件で引き受ける」ということなら良いかの」

「頼み、とは?◆」

「それは頼み事が出てきたときに言おうかの。ほつほつほつ」

「相変わらず喰えないじいさんだ◆」

その返事でヒソカが了承したのがわかつたネテロは、ヒソカにスカウターを渡す

「連れてこられた甲斐があつた◆逆に感謝しなくちゃね◆」

「そうじや、もののついでじや。ヨークシンにベジータ、ハンター試験の時のサスペンダー男じや、彼がおつたら伝えてくれんかの」

「クククツ、その呼び方は懐かしいね◆」

不覚にも笑うヒソカ

「『ウーロン』というブタに似た者を探しとるんだがの、もし見かけたら教えてほしいと伝えて欲しいのじや」

「…いいとも◆」

(こやつ…何か知つておるな)

ジーネーっと刺さる視線を他所に、ヒソカはネテロの別荘を後にした

（ヨークシンシティ 郊外）

「連れ戻して来い！」

ベジータが悟空に食つて掛かる

ネテロ会長のところに置いてきちまつた、と話す悟空にイライラしながら詰め寄つていた

「別にもういいじやねえか。あいつ見境なく攻撃すつし、それよりもレオリオの治療が先だろ」

「うるさいつ！オレ様がここに来た目的はやつと戦うためなんだぞつ！」

喚くベジータにおされて悟空は仕方なく瞬間移動する

（シユン

「本当に消えちまうんだな…」

（目を丸くするレオリオ

（シユン

（すぐに戻ってきた悟空

「もう居なかつたぞ」

「なにい!」

「ヨークシンに向かつて出発しちまつた後だつた」

「だからすぐ連れ戻していれば!」

「収まらない言い合いにレオリオが割つて入る

「まあまあベジータ。悟空の話じやヒソカはこのヨークシンに向かつてるんだし、近い内に会えるさ」

それに、と続ける

「クラピカがヒソカと繋がつてるはずだ。ゴンやキルアと一緒に居ればクラピカから連絡も来るはずだしそ」

「…ふんつ」

そっぽを向くが、納得している風だ

「んで、ゴンやキルアたちはどこに居んだ?」

尋ねる悟空にレオリオは答える

「ベーチタクルホテル、オレ達が泊まつてゐるホテルさ」

【62】グリードアイランドを知る

「ヨークシンシティ ベーチタクルホテル フロントへ

「あ！レオリオお帰り！」

ゴンが勢よく立ち上がる

「なんだよ、レオリオの方が遅かつたじゃん…って、ベジータさんに悟

空！」

キルアも席を立つて近づいてくる

「おっす！2人とも久しぶりだな！」

手を上げる悟空と、静かに指だけ上げるベジータ

「お前達の方は情報手に入つたか？」

レオリオが2人に尋ねる

「ああ、嫌な情報付きだがな」

「あ！お父さん！」「パパ！」

キルアが話そうとしたとき、悟天とトランクスがロビーに降りてくる

「遅いよお父さん。いまトランクス君と探しに行こうとしてたところ
だつたんだよ」

「悪い悪い。それよりほら、言つてたゴンとキルアだ」

2人と、そしてレオリオを紹介する悟空

「こんばんは。孫悟天です」

「ボクはトランクス、よろしくね」

ペコリ、と挨拶をする

「よろしくね」

「おう！」

ゴンとレオリオも挨拶を返す

「意外過ぎるだろ」

キルアは一人驚く

「子供いるとは聞いてたけど…なんか普通に礼儀正しいし！」

それを聞いてベジータはニヤつく

「ふん、当たり前だ。オレの息子だからな」

「2人はいくつなの?」

ゴンが目線を合わせて尋ねる

「7歳だよ。トランクス君は8歳」

「オレとキルアは12歳。レオリオは20歳だよ」

「…見えない……」

トランクスがレオリオを見て咳く

「悪かつたな!」

アハハ、と笑う悟空たち

「そろそろいいか?」

キルアが本題に入りたい、と声をかける

「フロント前のこのロビーじゃ不用心だな。部屋に行こう」

レオリオがそう促し、3人が泊まる部屋へと悟空達を誘つた

「ベーチタクルホテル 8003号室」

「うわーーー高いなあ」

悟天が窓からの景色を見て喜ぶ

「なんだ悟天、おめえいつもここより高いどこ飛んでんじゃねえか」

「自分で飛ぶのとは違うもん」

さて、とキルアが話し始める

「悟空達も来たからはじめから話すよ」

キルアは悟空たちにもわかるように話を始めた

・ゴンの父親がどこかへ行っていること

・手掛けかりがグリードアイランドというゲームにある

・ヨークシンのオークションに出品されること

・最低落札価格が89億ジェニー

・ゲームは危険なこと

・念能力者が作ったゲームであること

・ゲームに吸い込まれること

・行き着く先は全員同じゲーム内であること

「これ以上はわからない」と、ここで区切る

「89億…それで最低価格だとしたら5倍は見とかねえとな」

オークションを知るレオリオが補足する

「別にそんなに高くないじゃん」

トランクスは頭の後ろで腕を組んで余裕の表情

「あ、ベジータさんに4億ジエニー返さなきや」

ゴンが思い出したようにライセンスカードを取り出す

「なんの金だ?」

既に忘れているベジータ

「天空闘技場のお金だよ!」

「…そう言えばそうだつたな。だがカードなど持つとらんぞ」

「カードつて…」

そう言うベジータの隣でトランクスがポケットをガサゴソし始める

(…あれ?ない?え!?)

「どうしたのトランクス君?」

悟天が首をかしげる

「…クレジットカード…家に忘れて来ちゃつた…」

「…」のホテル代どうするの…?」

心配になる悟天

「それがねえとどうなるんだ?」

(…?)

問題に気づいてない悟空とベジータ

「と、とりあえず全部下ろして渡すよ」

ゴンは夜間銀行へお金を降ろしに出て行つた

【63】 オークション？

「ベーチタクルホテル 8003号室」

ゴンが銀行にお金を降ろしに行つてゐる頃

「ねえねえ、グリーなんとかつてそんなに危険なの？」

悟天とトランクスが興味津々でキルアに問いかける

「オレもやつたことないからわからんねえよ。ただ、ハンターサイトの

情報だから間違いはないはずさ」

「そんなに危険ならオラもやつてみてえなあ。ベジータもどうだ？」

「念能力者が作つた、というのは興味があるな」

「ネン？ それつてヒソカの超能力みたいなやつか？」

ベジータの言葉に反応する悟空

「そうか、まだ貴様は知らなかつたな。ちようどいい、ゴンやキルアか

ら時間見つけて学ぶことだな」

「へー、おめえたち超能力使えるようになつたんかあ」

感心する悟空

「いや、まあ合つてるような違うような…」

返事に困るキルア

そこにトランクスたちは意氣込んで質問を重ねる

「どこで買えるの!?」

「いつ買えるの!?」

二人の勢いにたじたじになるキルア

「落ち着けよ2人とも。オークション会場で買える。市の中央区にあるからすぐわかるさ」

「いついつ！」

「1つ目は早速明日だな。だけどお金が足りない」

「ちつ、と口を尖らせるキルア

「オークションだけでも見てみたいなあ」

「わくわくするよなー、悟天！」

わくわくしているトランクスと悟天

そこに黙つていたレオリオが口を割る

「オークション会場に行くことは良いことさ。オレたちは2つ目以降のゲーム落札を目標に、明日からは金策だがな」

「なんだよレオリオ、何か良い方法あんのかよ」

聞いてねえぞ、とキルアが顔を向ける

「明日の朝になつたら話すさ」ニヤツ

そんな話をしていると、ゴンが戻つてくる

ガチャヤ

「ただいま。はい、ベジータさん」

アタッシュケースをベジータに渡す

「トランクス、持つていろ」

そのままトランクスに渡すベジータ

「これがあればオークションで何か買えるかも」

ニヒヒ、と悟天と笑い合うトランクス

「おいおい、子供だけじゃオークション会場入れないぜ」

そう言い、悟空とベジータをちらりと見るレオリオ

「オラも行かなきやなんねえのか!」

「お父さん、一緒に来てよ」

せがむ悟天

「…パパ、だめかな?」

同じくトランクスもベジータを見上げる

「ちつ」

その返事が肯定だとわかるトランクスは大喜び

「じゃあもう遅いし、今日はこの辺にしよ」

ゴンの言葉でその日はお開きとなる

部屋から出していく悟空たちにレオリオが声をかける

「あ、オークション会場はそんな服装じゃ入れないからな。ホテルのフロントでスーツ借りてくの忘れるなよ」

トランクスが領いたのを見て安心するレオリオ

そして、平和な1日が終わる

【64】地下競売とオークション　“9月2日”

9月2日

「ヨークシン路地」

「んで？こんな路地に出店構えたあとは？」

キルアが片眉を上げてレオリオを見る

「競売するんだよ」ニヤリ

「このダイヤで？」

ゴンが掲げるダイヤは、先ほど中央区の宝石店で買つてきたものだ
「一個しか買つてねえし、しかもこんな路地で300万ジェニーの宝

石なんて売れねえよ」

不満げに言うキルア

「いや、これでいいんだ」

クイツとサングラスを持ち上げるレオリオ

「ねえ、レオリオもうそろそろ教えてよ」

気になるゴンもレオリオに尋ねる

「いいか——」

そしてレオリオは説明する

〈条件競売〉

ダイヤは景品。

ゴンと腕相撲をして買つたら贈呈。

参加費は一回1万ジェニー。

「な、簡単だろ？ ギリギリで勝つ、そしてたまに疲れた振りをしてたら
更にOKだ」

どうだ？と2人を見るレオリオ

「まあやれそうかな」

「いいぜ、面白そうじゃん」

そして条件競売、腕相撲が始まる

「ベーチタクルホテル フロント」

「おじさん、スース？っていうのある？」

ホテルマンに尋ねるトランクス

「君が着るのかい？」

まだまだ子供なトランクスを見ていぶかしむ

「うん、あとこつちの悟天の分と、大人2人」

大人がいることに気づいて頷くホテルマン

「さ、どうぞ」

そう言つて大人用2着、子供用2着を渡した

「ヨークシンシティ ホテル一室」

「今日が競売、か？」

落ち着かなげに、クラピカは部屋をうろつく

「落ち着いて♪」

センリツが笛を奏でてクラピカを落ち着かせる

「ああ、すまない」

「いいのよ。あなたの大事なものが何かも教えてもらつたことだし。
理由が理由だものね」

緋の目、その競売の行方が気が気ではないクラピカ
だが、護衛の任から外れられずやきもきしていた

センリツの音色で落ち着いてはいるが、このヨークシンに幻影旅団
がいる、その事も静かにクラピカの怒りを再燃させていた

「ヨークシン路地」

「さあさあ！次の挑戦者は！」

レオリオが手を叩いて競売へ集客する

スツ

女性が手を挙げる

「お、可愛らしい女の子が挑戦かな」

鼻の下を伸ばすレオリオ

女性はすり下がつたメガネを持ち上げながら席に着く
ゴンと手を握りあつて準備は完了

(あれ? この女性…)

ゴンが不思議に思つた瞬間

「レディー ファイツ！」

レオリオの合図で始まる

ミシツ

拮抗するゴンと女性

「んー」

「…………！」

そして

グググググツ パタン

徐々にゴンの側へ傾き勝敗がつく

女性はペコリと挨拶をして去つていく

「おいゴン、いま本気じやなかつたか?」

ボソリと呟くキルア

「うん、一体なんだろう…?」

「腕相撲のチャンピオンとかじやねえのか?」

キルアが茶化してその場は終わる

そしてその後も難なく競売は順調に進んでいた

♪オークション会場♪

「へへ、ここがなんとかつちゅう場所かあ」

「お父さん、オークションだよ」

「パパ、楽しみだね！」

「一々服装を変えねばならんとは面倒なことだ」

悟空、ベジータ、悟天、トランクスの4人は、オークション会場へ

とやつて来ていた

目標はグリードアイランド

そして受付で呼び止められる

「オークションカタログはお持ちですか？」

「なにそれ？」

悟天が聞き返すと、あからさまに侮蔑の目をして続ける受付員
「このオークション会場で行われる、全ての目録が掲載され、且つ入場チケットの代わりとなつております。購入できる方のみ入場が許可されております」

「ふーん。で、おばさんこれで足りる？」

ガチャ、とアタッシュケースを開けるトランクス
中には4億ゼニー

「……も、もちろんですとも！ ようこそオークション会場へ！」

1200万ゼニーを払い、カタログを受け取った悟空たちはオークション会場へと入つていった

♪ヨークシン路地♪

「さあ、次は誰だ？ そろそろ疲れてきてるからやり時かもしれないぜ！」

レオリオが言葉巧みに挑戦者を誘う

「じゃあやらせてもらおうか」

顔にターバンを巻いて素顔のわからない男が手を擧げる
肩には見慣れない動物も乗っている

「おい、ゴン。なんか…」

「うーん、なんか…」

顔が全くわからないため、見覚えがあるとは言えないが、何かが

引っかかる2人

レオリオは何も感じていないようだ

ゴンと男は腕相撲の体勢に入る

「レディー ファイツ！」

ガギツ

ゴンが歯を食い縛つて力を入れるが、全く動かない
「一般人にしてはだいぶ鍛えてるな…すまない」

ドンツ

そして腕は男性の側に倒れる

「ま、まじか…勝者、男性！」

呆気に取られるも、急いで勝ちを宣言するレオリオ
ここで渋れば客は付かなくなる

「さあ、このダイヤは君のものだ！受け取つてくれ！」

鑑定書と共にダイヤを手渡す

受け取つた男は顔は見えないが喜んでいるようだ
そして立ち去つていく男性を見ながら、レオリオたちは店じまいを
する

「レオリオ、全然儲かんねえじゃんか」

口を尖らせるキルア

「キルアの言うとおりだよ。まだ100人ともしてないよ？200万
ジエニーくらい損してるもん」

2人の攻め口が上がるが、レオリオはニヤリと笑つている
「いいんだ、餌撒きつてことよ。今日はもうすぐ日が暮れるし終わり
だな。明日もやるぜ」

そして3人はホテルへ戻つて行つた

♪ヨークシンシティ 廃墟ビル街♪

幻影旅団のメンバーが揃つていた

ヒソカを除いて…

「欲しかつたなあ」

ダイヤを思い出して呟くシズク

「盗めばいいんだよ。オレたちは盗賊だからな」

大柄の男、フランクリンの手がシズクの頭を優しく包む

「そういうことだ」

スクツ と團長クロロが立ち上がる

「オークション会場の競売品、全てを盗む」

「そいつはやべえよ、ここマフィア全てを敵に回すことになるんだぜ！」

毛皮を纏った男、ウボオーギンが叫ぶ

「なんだ？ 怖いのか？」

「嬉しいんだよ…命令してくれ團長!!」

ふつ、と笑むクロロ

そしてクロロは言う

「全てを盗んでこい」

（オークション会場）

「長いよお」

「つまんねーの」

悟天とトランクスは完全にダレきっていた

目的のグリードアイランドの競売までが長く、入札が繰り返される

同じシーンばかりで飽きていた

暫くしてすやすやと眠りに着く2人

「しようがねえなあ」

頭をポリポリと搔く悟空

そして次の商品が運ばれてきたとき

【65】悟空たちのオークション

「オーケーション会場内」

舞台に次の商品が運ばれてくる

「ベジータ、そういうやオーケーションのやり方覚えてつか？」

「貴様ちゃんと聞いていなかつたのか！」

舞台ではオーケショニア（競売員）が商品説明を始めていた

「——グリー」

「ベジータ！ちょっと待て！」

悟空が競売員の声に反応してベジータを止める

「——ツド、このゲームは2つセットです！」

「ゲームって言つてつぞ！」

「貴様のせいで危うく機会を失うところだつたぞ！」

慌てて舞台に注目する悟空とベジータ

「なんとこのゲーム！噂では人を吸い込むと言われています！生きて帰つたものはいる・いない、と謎多きゲームです！」

「こ、これだベジータ！」

「なんでも、『人を鍛えるゲーム』、『コレクターゲーム』などと言わ
れております！」

「なるほど、鍛えるゲームか」

嬉しそうに笑うベジータ

「さあ、このゲームの価格は…1億ジェニーからスタートです!!!」

「この商品のオーケーションがスタートする

「い、1億なら買えるんじやねえかベジータ？」

「値上がりしなければな。見ておけ、持つてる額まで入札してみる」

会場から手が挙がる

「おおつとー！早速1人手が上がりました！1億3千万ジェニーです

！」

ベジータも慌てて手を挙げる

人差し指、中指、薬指だけを立てる

「おおー、こちらも上がりました！3千万プラスで、1億6千万ジェ

二一です！」

他の商品より手の挙がりが悪い

オークションに参加するのは富豪ばかりで、自分の体を鍛えること
に興味がないためなのか

だが、最初に挙げた男がもう一度手を挙げる

「おお！また被せてきました！1億9千万ジエニー！」

チツと舌打ちしながら手を挙げようとするベジータ

「なあベジータ、その指の形なんだ？この親指立てたやつはなんだつ
け？」

「バツ…！」

慌てて下げさせようとしたベジータだつたが、間に合わない

「おおおお!!倍額です!!3億8千万ジエニー…!!これで決まるか!?」

「いいい!!お、オラが挙げちまつたことになんのか!?」

「バカ者め!!あれほど何もするなと言つたはずだぞ!!」

先ほどの男からは手が挙がらない

「では…3億8千万ジエニーで落札です!!」

競売員からの大きな拍手が鳴り響く

「受け渡しの説明は全オークション終了後ですが、お急ぎの方は近く
の係員までお申し付けを！」

そして商品はカーテンの奥へ運ばれていく

「な、なあベジータ。お金…足りつかな？」

「ギリギリだバカ者め！」

4億ゼニーから、カタログ購入の1200万ゼニーを引いて、残り
は3億8千8百万ゼニーだつた

「すまねえベジータ。このあとはどうすんだ？」

「もう用はないだろう。目当ての物も買ったことだ」

そう言つてトランクスを抱える

悟空も悟天を抱えて立ち上がる

会場から出た悟空たちは、競売受付でお金を払う

「品物の受け渡しは2日後となります。どちらのホテルにご滞在で
しょうか？」

「なんだ？いま受け取れねえのか？」

「申し訳ございません、全てのチェックが完了するまでお渡しする」とができませんので…」

「ちつ、どうやら待つしかないようだな」

悟空たちはホテルの場所を伝えて帰路についた

そして、悟空達が帰つたあと

オーラクション会場内ではオーラクションが続いていた
だが、先ほどまでの競売員ではなかつた

商品を運んでくる係員も違う

観客はあまり気にしていない

気づいた者もいたが、次の商品が高価な為か
額、そして口の左右、顎に傷痕がある屈強な男が台車を押す
そして舞台についたとき
新たなオーラクションが始まる

【66】念を学び始める

「ベーチタクルホテル フロント」

「おっ、悟空たちもいま帰りか？」

ホテルのドアをくぐつたところでレオリオに声をかけられる
「ああ、オークションで目当てのものも買えたしな」

「グリードアイランドをか!?」

悟空が返事をしていると、悟天が目を醒ます

「ん⋮」

「なんだ悟天、いま頃起きたんか」

「…あれ？ オークションは？」

キヨロキヨロと辺りを見回す悟天

悟天の声に反応してトランクスも起きる

「パパ、オークションは？」

「もう終わつて帰つてきたぞ、つたく」

ベジータはトランクスを降ろす

そこにゴンとキルアも帰つてくる

「あ、悟空たちだ」

「で、オークションどうだつた？」

キルアの問いかけに同じように悟空が返す

「おう、ちゃんと買えたぞ」

「え？ グリードアイランド買えたの!?」

ゴンとキルアが驚く

「ふん、当然だ」

「ええー、オークション見逃しちゃつたの!?」

トランクスと悟天は違う意味で驚くが、ゴンとキルアは構わず続ける

「ベジータさんどこにあるの!?」

「悟空が持つてるのか!?」

勢いよく話す2人に、とりあえずは部屋で、とレオリオが促した

「ベーチタクルホテル 8003号室」

「なんだよ、2日後かあ」

「オーケーションの商品受け渡しが2日後と知つて落胆するゴンとキルア

「オーケーションやつてみたかったのになあ」「つまんない：」

悟天とトランクスも不満気味

そこにレオリオが口を挟む

「で？悟空はそれまでどうするつもりなんだ？」

「んー、修行でもすつかなあ」

呟きながら修行のメニューを考えていると、ベジータが悟空に提案する

「貴様も念とやらを知つたらどうだ？」

「そういうや『ネン』がどうとかつて言つてたな」

昨日、ベジータがキルアたちに教えてもらえ、と言つていたのを思
いだし、キルアの方を向く

「悟空たちならいいぜ。気のことを教えてもらつたお礼もあるし」「うん、日中じやなければ別にいいよね」

キルアと見合うゴン

「ねえねえ、ネンつてなあに？」
「ボクも気になる」

目がすっかり醒めたトランクスと悟天

じやあ、とキルアとゴンが練をしてオーラを作つてみせ始めた

「オーケーション会場」

淡々とオーケーションが進み、今日の最後の商品が運ばれてくる
“緋の目”

そしてそれが舞台の中央に運ばれてきたとき
顔に縫い跡のある大男が観客席を向く

「そんじやまあ、くたばるといいね」

折れた指先からマシンガンのような銃弾が飛び交い、観客を蹂躪する

る

十秒もかからないうちに会場は静まり返る

そして掃除機のようなものを持った女が死体や椅子など全てを吸い込む

客席から何もかもが消えるまで数十秒もかからない

そう、彼らは幻影旅団だつた

「ベーチタクルホテル 8003号室」

「これが念の力だぜ」

バリバリバリバリ

オーラを電気に変えて放電して見せるキルア

ゴンも指先に貯めて尖らせたオーラで缶を切り裂く

「おおー。キルアのは超能力みてえだな」

興味深そうに見る悟空

「わあ！すごいすごい！」

「ボクにも教えて！」

トランクスと悟天が飛び跳ねる

「オラもそんなことができるようになるんか？」

そんな悟空の質問にキルアが放電をやめて答える

「それはわかんねえ。それぞれ得意な系統があるみたいでさ」

「けいとう？」

いまいちよくわからない、と眉をひそめる悟空

だよな、と一息吐くとキルアは念について説明し始める

そして――

念を間近で見ていた悟空たちは、オーケーション会場での出来事に気

づくことはなかつた

【67】悟空の水見式

「ベーチタクルホテル 8003号室」

「——つて感じで、六系統あつて、この水見式でわかるつてこと」
あらかた説明を終えたキルアは、水見式を悟空たちに試してもらう
「おつし、んじややってみつか」

悟空がグラスの前に立つ

氣を手のひらからグラスに向けて出しながら添える
スウツ パツ

中の水が赤になつた瞬間、消えてなくなる
残された葉はゆらりとグラスの中に落ちる

「えつ!」

「どういうこと!?」

キルアとゴンが飛び付くようにグラスに駆け寄る
「水が消えちまつたけどどういうことだ?」

当然、悟空はわからない

「水が消える……? そんなことウイングさんは何も言つてなかつたな
…」

考え込むキルア

「その前に真つ赤にならなかつた?」

ほら、とゴンがグラスについた水滴を指す

「おいおい、どういうことだ? オレが調べた限りでは2系統の反応が出るなんて載つてなかつたぜ!」

自力で念を覚えたレオリオも、その現象がわからないと言ふ

ただし、水が消えたことには心当たりがあった

「水が消えるのは——」

レオリオがそう言いかけたとき

「特質系、というやつじゃないのか?」

しばらく黙つていたベジータが口を開く

「とくしつけい?」

頭にはてなを浮かべる悟空

「こいつはオレたちと違つて特殊な技を使いやがる。お前たちも見た
だろう”瞬間移動”をな」

あ！と氣付くキルア

「そういうことか！悟空のあの能力！考えてみたら特質系くらいじや
なきやできない！」

「水が赤くなつたのは…じゃあベジータさんと同じく2系統示したの
は、どつちかが放出系だから？」

ゴンの言葉にキルアが頷く

「ベジータさんは水が増えて青になつた…念が強化系で気が放出系。
なら悟空は念が特質系で、気が放出系ってことになる」

キルアの解説を聞きながら、悟空は首をかしげたま
「わからんようだが、貴様には細かい説明など不要だ。自分が念を使
うのではなく、念を使うやつがどんな攻撃をしてくるか、それを学べ
ばいいだけだ」

ふんっ、とベジータはそこまで言うと腕を組む

「よくわからんねえけど…なんかいろいろなことができるみてえだな」

ふむふむ、と頷く悟空

そこで、何か気づいたようにキルアがレオリオの方を向く

「そういうやさ、レオリオも悟空の念に気づいたみたいだけど…なんで
だ？」

いや、まあ…、と頭をかきながらレオリオは答える

「実はオレも悟空の真似して、あの能力を使えるようにしようと思つ
たんだよ…」

「へー、確かに便利だもんな」

「便利なんてもんじやねえ！あれば使えたら世界中のどこにでも病人
の元へ一瞬で駆けつけられるんだぞ!!」

熱くなるレオリオ

「…簡単に言つて悪かつた」

珍しく小さく咳くように謝るキルア

「オレの方こそ熱くなつてすまん。で、だ。あの能力をやろうと思つ
たんだが、放出系のオレじや無理だつたんだよ」

「あれ？ レオリオ放出系なの？ 強化系かと思つてた」

ゴンがレオリオの系統を聞いて驚いたように口を挟む

「ああ、心源流のさつきの水見式試したから間違いないな。で、どの念の系統だつたらできるか調べたんだが、どの能力もできねえんだ」

「なんで？」

そのまま素直に尋ねるゴン

「悟空がやつてるのは、念を補助する神字も何も使わず、体そのものを瞬間に移動させること。放出系や具現化系では、神字の補助を使って体の一部、もしくは体に似せた形のものを移動させることしかできない」

すげえんだな、とそれを聞いて頷くキルア

「何人か集まればできるのかもしけねえが、まず一人じや無理だつた」

うん、と頷くゴン

「わかるよ。レオリオがさつき熱くなつたことからも、本気で調べたつてことがね」

「ありがとよ。で、せつかくだからオレの能力も見せるぜ」

そう言うと、レオリオは針と糸を取り出す

「手術用？」

しげしげと見るゴン

「いいか…」

ヒュッ

手首をぶれるくらいの速度で動かしたレオリオ

全員が見守る

「…何が起こんだよ？」

何もないじやん、とキルアがレオリオに言う

「いや、終わつたぜ」

そう言うと、レオリオは悟空が水見式をしたグラスを指す

「何かしたの？」

そう言つて確認しに行くゴン

そして

「――この葉っぱ、縫われてる!!」

ゴンはグラスの底にある葉を持ち上げる

「なつー！レオリオどうやつたんだよ！」

キルアも驚いてレオリオを振り返る

「わー、ボクにも見せて見せて」

悟天とトランクスも葉っぱを手に持つて楽しそうに見る

「レオリオ！すごいや！こんなに離れてるのに本当にどうやつたの

!?」

レオリオとグラスは3mは離れていた

そしてグラスの上ではなく、底に落ちていた葉

どうあつても届かない

レオリオはくいっとサングラスを持ち上げて言う

「『空間移動』それがオレの能力さ」

【68】オークション会場襲撃のあと

「オークション会場 上空」

「オラ!! 降りてきやがれ コラア!!」

怒号が飛び交う

オークション会場を襲撃した幻影旅団たちは、気球で会場をあとにしていた

会場の異変に気づいたコミュニティを仕切るマフィア達は、上空の気球を発見

犯人と断定して追跡を開始した

「おい、会場には観客も椅子も何もなかつたらしいぞ!」

会場を見てきたマフィアの一人が情報を伝える

「まさか!…敵は能力者!? 十老頭に連絡だ!!」

そして上空、気球の上では

「おーおー、うるさい蟻共が騒いでやがるぜ」

ウボオーギンが下を見ながら笑う

「そんなことどうでもイイネ。問題はお宝ヨ」

「そうですよ。なぜ金庫が空っぽだつたのか」

フェイタンの言葉にシャルナーネが補足しながら頷く

そして電話をかけ始める

「あ、ダンチョー? オークション会場、お宝なにもなかつたですよ。事前にフクロウとかいう陰獸が移動させたとか」

『なるほど…』

「もしかして情報漏れてます?」

『それは…ユダがいるということか?』

『そういうわけじゃないんですけどね』

『ユダはオレたちの中にはいない。何かの噂を聞いたコミュニティの上層部がやつたことだろう。だが…単なる噂を信じる者が上層部にいる…いや、信じるに値する噂を流せる者がいる、といったほうが正しいか』

「とりあえずマフィアたちの掃除をしたら帰りますね」

電話を切ったあと、みんなの方へ振り向くシャルナード
「と、いうことで。このまま気球は荒野に向けてください。そこでマ
フィア全部片付けて帰りましょう」

ニコツ、と笑つてそう伝えた

「ヨークシンシティ あるホテルの一室」

そしてちょうどその頃
クラピカの元にも情報が届いていた

“オークション会場襲撃”

（オークション会場を襲うなど、普通の者なら考えない。普通の…まさか幻影旅団!？）

はつ！と顔を上げるクラピカ

ばつ！と振り向くクラピカ

そこにはダルツオルネが居た

「シャツチモーノたちとの連絡が取れない」

「…多分…、オークション会場の襲撃者は幻影旅団…」

そのクラピカの呟きにダルツオルネが目を丸くする

「幻影…旅団、だと!?あの！」

「そうとしか考えられません」

「くそっ！なら生存確率はほぼ0か！」

どうしますか？と尋ねるように問うクラピカだが、その表情は追いかけることしか念頭にない

「もちろん、追いかけるさ。もし本当に幻影旅団ならコミュニティへ恩を売るチャンスだ！」

そしてダルツオルネとクラピカはセンリツを連れて車に乗り込み、動き始めた

【69】悟天とトランクスの水見式

「ベーチタクルホテル 8003号室」

「この能力で傷もなく手術ができる」

ちよつと自慢げに言うレオリオ

「実際どうなつてんだよ」

そんなレオリオに説明を求めるキルア

「さつき言つた通りさ。指先、もしくは指先に持つたものだけを空間移動させることができるのさ。神字を使わない代わりに、範囲はせいぜい3mつてどこか。頑張れば拳くらいは空間移動させれるぜ」

「はあー、ほんと凄いや」

感心しきるゴン

「すげえけどさ、実際こう見ると医療と暗殺ってすげえ近いもんなんだな」

そう呟くキルア

「どうして？」

「考えてみろよ。気付かないうちに心臓の大動脈切られるかもしがねえんだぜ」

ゴンの疑問に恐ろしい例えで返すキルア

「ま、武器も念も使う人次第つてことだな」

そうレオリオがまとめると、悟天とトランクス水見式をしたいとせがみ始める

レオリオはグラスに水を注ぎ

「ほらよ、悟空たちの子なら何が起こつてももう不思議じやねえな」

そう言いながら水の入ったグラスをテーブルに置く

「ねえ、もうやつていい!?」

トランクスが手を伸ばす

「えー、トランクスくんずるいよ」

「悟天もすぐできるから待つてなつて」

そしてトランクスが手をかざす

「えつと…気を手から外に?」

「――ちよつとま」

ベジータが止めに入ろうとした瞬間
ドツザバアアアアアアアアアアア
道路に設置してある消火用水のごとく水が勢いよく吹き出す
「…あ、あはは」

苦笑いするトランクス

天井は水圧で大きな穴が空いている

「さ、最上階で良かつたね」

なんとか取り繕う

「ちつ、気の出しすぎだバカめ」

ゴンツとトランクスに拳骨を落とすベジータ
「あちやあ：部屋も廊下もぜーんぶ水浸しだぞ」

ドアを開けて廊下を確認していた悟空が戻ってくる

「ま、まじか：」

惨状に目を丸くするレオリオと、言葉が出ないキルアとゴン

「ゴホン」

わざとらしく咳をするベジータ

「い、いまのはマグレだ」

そうベジータが誤魔化している間、悟空は悟天に耳打ちする
「悟天、ちゃんと氣を抑えないとダメだぞ。いいか」
「うん、わかつたよ」

そして悟天がグラス近づいたとき

「あれ？トランクスくん、中に何か入ってるよ？」
鉄のような金属の塊がグラスの中に入っていた
「まさかトランクスも？」

レオリオがその金属を取り出す

「ものが現れるのは具現化系ってことだね」

それを見ながらキルアが言う

「じゃあトランクスは念が強化系で気が具現化系？」

ゴンが確認するようにキルアを見る

「いや、水の勢いが凄すぎてどつちが先だつたかわかんねえ。でもこ

の気の強さの感じだと、たぶん気が強化系で、念が具現化系かな」
そのキルアの説明を聞いてトランクスは喜ぶ

「え?! ジャあ何か作り出せるの!?

「つてことになるけど、何か作りたいものあるのか?」

「んーと、剣! カツコいいやつ!」

にんまりと笑つて いうトランクス

そこで我慢しきれなくなつた悟天がレオリオからグラスを受けと
る

「ボクもする!」

そして氣を小さくしながらグラスに向ける

スウウ ザバー

水が紫色に変化したあと、水が溢れてこぼれる

「…悟天もか」

既にレオリオは当然として見はじめる

「ボクのこれつてなあに?」

キルアの方を見る悟天

「悟天はわかりやすかつたな。氣が放出系で、念は強化系だな」

「何ができるの?」

「んー、特に変わつたことはできないかな。たぶん今までと同じ戦い
方が一番だと思うぜ」

そう説明したキルアだつたが、悟天は口を尖らせる

「…つまんない。ボクだけ新しいこと何もできない」

「拗ねるなよ悟天。ボクだつてまだ何か新しいことできるつて決まつ
たわけじゃないんだしさ」

トランクスが慌ててなだめるが、悟天は完全に拗ねて部屋を出てい
く

「ちょっと待てよ悟天! もお…パパ、悟天と先に部屋戻つとくよ」

そしてトランクスは悟天と共に、205号室へと向かつた

「んー、やつぱりトランクスと比べると悟天はまだ子供だなあ。オラ
が甘やかし過ぎてつかな」

ポリポリと頭をかく悟空

「貴様の甘さがそのまま受け継がれたようだな」

ふつ、と笑うベジータ

「ま、とりあえず部屋変えようぜ。修理代は半分持つてくれよな」

そう言つて部屋を出るキルアに続き、悟空たちはフロントへ向かい、修理費の手続きをし、キルアたちは部屋の変更を始めた

【70】ウボオーギンの余裕

「ヨークシン外 荒野」

「落とし前つけろやコラア!!!」

パンパン!!

幻影旅団たちが乗つた気球は、ヨークシンシティ外れの荒野へ降り立つていた

追いかけてきたマフィアたちは続々と終結しつつある
初めに着いていたマフィアたちは、銃声を轟かせながら威嚇する
だが、幻影旅団たちは崖の上から見下ろすのみ

彼らは待つているのだ

マフィア全てを一息に片付ける為に

「ヨークシン郊外 道路」

「見えてきたぞ！」

ダルツオルネの言葉の通り、遠くに気球の一部が見えてきていた
あと一山越えれば幻影旅団たちが居るであろう荒野へと着く
センリツは耳をそばだてる

「…もうだいぶ多くの人が集まってるわ」

「たぶんコミュニティのマフィア達だろう」

ダルツオルネが答える

クラピカはただ静かに指についた鎖を見つめていた

「ベーチタクルホテル 8011号室」

「結構高えんだな」

悟空たちはホテルの修理費、1400万ゼニー（キルアたちと折半）
を払つて、別の部屋を用意してもらつていた

「で、実際に念つてどんなことできんだ？」

悟空はキルアたちに念の能力について教わる

実際にどんな攻撃をされるのか、ヒソカを例にしてベジータも話始めた

そしてその頃

「ベーチタクルホテル 205号室」

「つまんない」

「そんなこと言うなよ悟天」

「だつてさ、トランクスくんは何か作つたりできるんでしょ」

「でもまだやつたことないし、できるかもわかんないよ」

それでも、とグズる悟天

「それにさ、——」

トランクスがそう口にしたとき

「——悟天！ いまの！」

「うん！ そんなに大きくないけど戦つてる感じの気！」

2人して顔を見合させる

ニシシ

「もちろん…」

「行こつ！」

ふわっ

そのまま飛んで行こうとする悟天

「待てよ悟天！ このままの格好で行つたらもしバレたときにパパたちに怒られるよ」

「着替えて行くの？」

チツチツチ

指を振りながらもつたいぶるトランクス

「どんな格好してたつて子供のまんまじやバレるさ」「わかんないよトランクスくん」

「よく思い出せよ悟天」

「えー、うーん」

考え込む悟天

「全く鈍いなあ悟天は。『天下一武道会』これでいいか?」

「あつ!パンティーマスク!」

ズコッ

「マイティマスクだよ!まつたく」

「そうだつたそうだつた」

そして2人はまた見合って笑う

「悟天、窓のカーテン取つといてよな」

そこの窓の長い方のカーテンな、と指示するトランクス

「トランクスくんは?」

「ボクはベルトの代わりになるものを探すからさ」

悟天とトランクスはガサゴソと動き始めた

【7-1】荒野で動きあり

「ヨークシン外 荒野」

悟天とトランクスが気づく少し前

ほぼ集結したマフイアを見下ろす幻影旅団

「こんなもんかあ」

腕組をして見ていたウボオーギンが振り返る

「まあこんなものでしょ。あとはパラパラと来るだけじゃないですかね」

そのシャルナードの言葉に満足し、ウボオーは腕を解く

「手…出すなよ」

ザシヤー

崖を滑り降りるウボオー

そこに1人のマフイアが進み出る

力チヤ

銃をウボオーに向ける

「宝と観客をどこへやつた?」

「知らねえなあ」ニヤリ

顔面に銃を突きつけられても平然と笑う

「てめえらの頭はどういつだ」

「さあてなあ」ニヤ

「ちつ、下つぱが」

ドンツ

マフイアは躊躇なく引き金を引いた

だが

その男、ウボオーギンは跳ね上げられた顔をゆっくりと顎を引くように戻す

その顔、いや、歯には銃弾が咥えられていた

「ペッ…、オレ様には銃なんか効かねえんだよ」

「…なつ！」

その瞬間

グシャ――

ウボオーはマフィアの頭を握りつぶす

「くくく…、どうした？・かかつてこいよ」

現状が理解できずに立ち尽くすマフィアたち

その目の前に、握りつぶした仲間のマフィアを放り投げる

「そいつあ飾りか？」

マフィアたちが持つマシンガンを顎で示すウボオー

やつと反応できたマフィアたちがマシンガンを構える

「やつとやる気出できたか？」

うおら―!!

氣合いの雄叫びと共にオーラを爆発させる

その念に反応した者が2人、ヨークシンのホテルにいた

そしてちょうどそこに1台の車が着く

キキー ガチャ

「もう始まつてやがるぞ！」

(あれがまさか幻影旅団か…?)

ダルツォルネに続きクラピカ、そしてセンリツが荒野に到着していく

た

♪ベーチタクルホテル 205号室♪

ガサゴソと荷物を漁つていたトランクスがバッグを持ち上げる

「このバッグの紐がベルトの代わりになるかな？」

「トランクスくん、カーテン取れたよ！」

ドタバタと準備する2人

「よし！・じやあ悟天まずそこに立つて

「うん！」

カーテンを持つて悟天の肩に乗るトランクス

「えー、またボクが下？」

天下一武道会と同じ組み合わせに文句を言う悟天

「この案考えたのボクだから文句言うなよな」

2人の体に上からカーテンを巻くトランクス

「よし、こんな感じだな。悟天、そこのバツグの紐取つてよ」

「これじゃ見えないよ。よつと」ボスボスツ

カーテンに穴を開けて視界を確保する悟天

「あ、あつたあつた。はい、トランクスくん」

最後に紐をベルト代わりに結ぶ

「——よし、これでバツチリ」

カラカラ

窓を開けるトランクス

【72】見せつけるウボオーギンのその力

「ヨークシンティ中心 あるホテルのフロア」

「幻影旅団の可能性はどれくらいだ？」

円卓に10人の壮年の男たちが向かい合って座っている

「マフィア共の言うことだから当てにはならんのじやないかね？」

「いや、ノストラードからの情報が当たつたことを考えるとあながち嘘ではないかもしけんぞ」

「最初に行かせた陰獣4人だけじや荷が重いか？」

「ふむ…ならば陰獣統括の彼に行つてもらうかね？」

部屋の扉の傍らに静かに立っていた男に視線が集まる

「ゞ命令とあらば直ぐにでも」

目を伏せて即答する男

「残りの6人の陰獣も連れて行くがよい」

「しかしそれではここに警備が…」

陰獣統括と共にこの10人の男たち、十老頭を護衛する身としては陰獣全てと共に出払うわけにはいかない

だが、十老頭はそれを見越して答える

「ここは問題ない。先生がいるのでな」

視線の先には十老頭が先生と呼ぶ男がいる

部屋の隅に置かれた一際豪華なソファーアに腰をかけ、自身の三つ編みした毛先を整えている男

男は見もせず、手だけで“行け”と指示する

「…わかりました。では、陰獣を連れて私も向かいましよう」

一礼をして男は出ていった

「ヨークシン外 荒野」

「どうしたあ――――!!」

ドオゴオオオオン

その頃荒野ではウボオーギンがマファイア相手に大立ち回りをしていた

まるで人を紙屑のように素手で千切つて投げ捨てる

ダダダダダダダダ

マシンガンの音は鳴り止まずに響き続ける

だが、ウボオーの体の前には銃弾など効かない

いつしかウボオーの回りには人が居なくなつていた
遠巻きに立ち、呆然とするマファイアたち

「どうした？もう終わりか？」

その言葉に反応できないほど、マファイアたちはあまりにも圧倒的な力を見せ付けるウボオーにのまれていた

ズキューネーン

その静寂を切り裂く鋭い銃声

「つてー、…ライフルか？」

ウボオーの顔にライフルの銃弾が当たつた

だが、普通の人間が消ゴムを投げられた程度の痛がり方
そしてウボオーは足元の小石を拾う

ライフルを撃つたスナイパーを見つけると、拾つた小石を投げる
ポンツという音と共ににはぜるスナイパーの頭

そのあまりの強さに絶望しかけた時

1人のマファイアがあるものを担いでウボオーの前に現れる

（ベーチタクルホテル 205号室）

そしてその頃

トランクスと悟天が変身したマイティマスクがベーチタクルホテルを飛び出した

ドヒューネーン

「悟天、場所ちゃんとわかってるか？」

「うん、大丈夫！」

「基本的な動きは下半身役の悟天なんだからしつかり頼むよ！」

「トランクスくんはちゃんと指示してよ！」

そんな話をしてる間にグングンと距離を縮める

ヨークシン中心街を抜け、郊外を抜け、あつという間に荒野が見え
てきた

「あ！悟天あそこだ！」

「わ！人がいっぱい！」

上空から荒野を見下ろすマイティマスク

「言つただろ、変装してたほうがいいって」

「さすがトランクスなんだよ」

へへーん、と得意気に胸を張るトランクス

「とりあえず岩場の影から観察しようぜ」

「うん、あそこ？」

ヒューン

全体を一望できる岩影を探し始めた

【73】陰獸到着

（ヨークシン外 荒野）

クラピカたちはウボオーラの強さに冷や汗を流していた
「…とてもじゃないが…捕まえるのは無理だ」

「本当に人なの…？」

ダルツオルネとセンリツは知らず知らずに後退りする
そのとき、ピクリとセンリツが背筋を伸ばす

「どうした？」

その様子を見逃さなかつたクラピカが問いかけるが

「——心音…増えてるわ」

耳をそばだてていたセンリツからその言葉が出たとき
スツ

どこからともなく人が現れる

「あいつらただのコソ泥じやない」

「殺しが生活の一部になつてるな。いわば殺しのプロだな、うんうん」

「餅は餅屋。オレたち陰獸に任せときな」

「……」ズリュ

いつの間にか横に現れていた4人

この4人こそが、十老頭の懐刀と噂される実行部隊である陰獸
そして先行して送り込まれていた

“病犬（やまいぬ）”

“豪猪（やまあらし）”

“蛭（ひる）”

“蚯蚓（みみず）”

4人はクラピカたちの横を通りすぎていく

その視線の先には暴れまわっていたウボオーギンの姿

「……こは、任せよう…」

陰獸のその存在感から、ダルツオルネの口から自然と出た言葉に誰も反論はしなかつた

その頃、マイティマスクは全体が見渡せる高所の岩場の影から様子を見ていた

「どつちが悪者？トランクスくんわかる？」

「んー、あの大きな人の周りにいっぱい人が倒れてるから…大きい人が悪者かな？」

ウボオーとマフィアを見てそう考えるトランクス

「でも周りの人たち銃持ってるよ？」

「そなんだよなあ…」

そして2人が迷っているとき

「あ、1人が前に出てきたよ」

大きな口ケットランチャーを担いだマフィア

「そこまでだバケモンが！戦車も一発でオシャカにしちまうスーパー・バズーカ砲だぜ！」

砲身をウボオーギンに向ける

「悲しいぜ。オレはたかが戦車と同じ評価かよ」

嘆く様子を見せながら右手を前に出す

口ケットランチャーを受け止めるつもりのよう

「コナゴナになれや!!」

バシユーー！ ドッゴオオオオオオオオ

着弾してもうもうと立ち込める煙

それを見ていたトランクスたちは

「トランクスくん！」

「うん！あの黒い服の男たちが悪そう！」

「いくよ！」

「力はギリギリまで下げとけよ！」

ふわつ シュン

浮かび上がったあとに高速移動するマイティマスク
遠巻きに見ていたマフィアたちの合間に縫うように通りすぎ、全て

の首筋に手刀を落として意識を刈つていく

そして残った、口ケットランチャーを撃つた男の前に出る

「貴様は——」

ドフツ

お腹に一撃を決めて倒れさせる

マイティマスクが岩影から飛び出してわずか3秒での出来事

「よし、つと。悟天、バツチリだぜ」

「いいなー、トランクスくんあとで変わつてよう」

そんなことを言っている間に煙が次第に晴れていく

【7-3】マイティマスクVSウボオーギン

「ヨークシン外 荒野」

遠くから見ていたクラピカたち
「何が起こつた…？」

「一瞬でマフィアが倒れたようだ…」

眉をひそめるダルツオルネにクラピカは事実のみしか答えられない

「ロケットランチャーの爆風か？」

「…いや、意識を失うくらいならもつと吹き飛ばされるはずだが…」

そう言つたあとにセンリツの方を向くが

センリツもふるふると首を振る

そしてクラピカたちの横を通りすぎてウボオーの近くまで來っていた陰獸たちは

「おい、見えたか？豪猪（やまあらし）」

「いや、かすかに何かが動いていたのがわかつたくらいだな、うんうん」

病犬（やまいぬ）の問いに、かすかに、と答える

と、煙が少しづつ晴れて1人の姿が見え始める

マントとマスクを被つた男だ

「おい、いたか？あんな男」

「いや、最初はいなかつたな、うんうん」

そこまで黙つていた蛭（ひる）が口を開く

「ぐしゅしゅしゅしゅ。どちらにせよこちら側のマフィアがやられたんだ。あいつも敵つてことでいいよ」

そろそろやるか、と臨戦態勢に入つたとき

マイティマスクの前で煙が晴れる
目の前には男が立つていた

(あれ?)

驚くマイティマスク

「…さすがにかなり痛えな」

男は掌をさする

そして異変に気付く

「な!?お前は誰だ!…というか虫けら共は…」

「えーっと、マイティマスクだよ!」

そんな問い合わせよりもトランクスたちは焦っていた
ボソボソとマスクの中では話する

(ねえ、トランクスくん。もしかして間違えたんじゃ…。悪い人つて
こっちだつたんじやないの?)

(あ、あの状況じや仕方ないだろ!)

(でも全員倒しちゃったよ…)

(う…パパたちに見つかつたら相当怒られるかも…)

まずいぞ、やばいぞ、と2人でボソボソ話す

「おい!てめえ聞いてんのか!」

無視した形になつてているマイティマスクに拳を繰り出すウボオー
パシツ

それを見ることもなく受け止めるマイティマスク

「な——!」

驚愕するウボオー

拳を戻して自身の拳を見つめる

別に力加減などしなかつたはずだ

だがマイティマスクは突つ立つたまま動かない

(トランクスくん、どうするの?)

(うーん、喧嘩両成敗?)

(え? どういうこと?)

(ほら、黒い服の人たちと、この男の人が喧嘩してたんだから、黒い服
の人たちは倒しちゃつたから、あとはこの男の人を倒して終わり、つ
てこと)

(あ、そうだね。じゃあバレないようにさつと倒していくこ)

そして振り返るマイティマスク

「やいやい！ いっぱい暴れまわったようだな！ この正義のマイティマスク様がぶつとばしてやるぜ！」

「正義のマイティマスクだ？ ああん？」

怪訝そうにするウボオー

（えーっと、とにかく力を弱めてつと）

トランクスは拳の力を最低限まで抜く

「よつ」

パンツ

顔面に向けて放ったパンチはウボオーの掌に止められる
(あれ？ 弱すぎたかな。 さつきの男の人を殴ったときと同じくらいの力を入れたんだけど…)

「…てめえ何者だ？ 強えかと思つたらこんなパンチ繰り出して来やがつて。 いいか、パンチつてのはな…」

そう言つて右こぶしにオーラを溜めるウボオー

「こうやるんだよ！」 超破壊拳” !!!

拳から溢れんばかりのオーラを放ちながら右ストレートを繰り出す

だが：

パンツ

左手でそれを軽く受け止めるマイティマスク

「——なんだと!?」

自身の最高の技をいつも簡単に受け止められたウボオーは立ち尽くす

「うーん、じゃあこれくらいかな？」

力加減を少し変えてウボオーの顔面に向けてパンチを返す

ヒュン

メキヨツ！ ドヒューハーハーン

顔面に当たつたと同時にきりもみしながら吹き飛んでいくウ

ボオー

そのまま崖にぶつかり轟音を立てて沈む

「よし、こんくらいだな」

「トランクスくん、じやあ帰ろつか
にんまりと笑うトランクスと悟天

【74】マイティマスクVSノブナガ

「ヨークシン外

荒野」

だが、それを見ていた他の幻影旅団たちは即座に反応する
シャルナーネがウボオーヘと駆け寄る

残りは一斉にマイティマスク目掛けて動く
フェイタン、シズク、マチ、フランクリン、ノブナガ

5人は1秒とかからずに一斉にマイティマスクへ攻撃を繰り出す
シャシヤシヤシヤシヤ

その全てをかわしきるマイティマスク

「危ないなあ…」

((((一休何者だこいつは?))))

そう5人が思つた時

その場に乱入してきた4つの影
ガキインツ

フェイタンの剣と病犬（やまいぬ）の牙が甲高い音を立てて交差し
たのをきつかけに、残りの幻影旅団も陰獸との戦いに引き込まれる
1人浮いたノブナガのみ、マイティマスクと対峙する

「よお。やつてくれるじやねえか」ピキピキ

怒りで血管が浮き上がるノブナガ

相棒であるウボオーヘがやられて相当な怒りが立ち込めていた
「なんだよおっさん。もう帰るところなんだけど」

そつけなく言い放つマイティマスク

「どうやら覚悟はできてるらしいな」

カチャリ、と腰に差した刀に手をかけた

その頃クラピカたちは

「やらせてくれ」

「だめだつ！」

クラピカとダルツォルネの押し問答が続いていた

ウボオーが口ケットランチャード撃たれたあと、裸姿になり、背中の蜘蛛の刺青が見えたあとからだ

急にクラピカの態度が変わった

「ならばもういい、一人でもやる」

制止を振り切り歩みを進めるクラピカ
ふわつ

そこに一瞬で花畠が広がる

「…落ち着いたかしら？」

センリツが音色で落ち着く景色を見せていた

「…ああ、度々すまない」

そう言いながら、顔を上げて続ける

「だが、勝算がある」

そう言いきつたクラピカに、ダルツォルネも頭を冷やして話を聞き始めた

そしてマイティマスクとノブナガ

「もうオレの間合いに入つてんだよお前はなつ！」

シユ パシツ

居合い抜きをしたノブナガの刀を掴むマイティマスク

「――？ な、なんなんだお前はっ！！」

「そんなスピードじゃ切れないよおっさん」

パツと手を離して刀を解放するマイティマスク

「…ちつ、くそつ!!」

ヒュヒュヒュヒュヒュ

斬撃を繰り出し続けるノブナガ

「まさか陰獸がここまでやりやがる野郎だとはなつ！」

聞き慣れない言葉を耳にする

「いんじゅう』？」

その聞き返しにピタツと手を止めるノブナガ

「なんだ…？ お前さん陰獸じゃないのか？」

「だからなんだよそれ」

「何つて言われてもな…、横で戦つてる4人の奴らの仲間だろ？」

ちらりと横を見る

確かに急に現れた4人組だ

「ううん、知らない」

「じゃあお前は誰だつづー話だ」

「だから言つたじやん、マイティマスクだつて」

「…あー、そうかい。悪かつたな。じゃあ帰つていい」

ヒラヒラと手を動かして帰れと合図するノブナガ

「あれ？いいの？じゃ！」

嬉しそうに後ろを向いた瞬間

シユピン

ノブナガの刀が胴体を切断する

「…いまのを避けるか」

服を薄く一枚切った手応えしか残らなかつた

だが、マイティマスクの体は完全に上下に分離していた

「へ…？」

上下に視線を動かすノブナガ

（やつべ！帰るぞ悟天！）

（う、うんっ！）

ドヒューキーーーーン

下半身と上半身が空を飛んで一瞬で消えていく

「…子供2人、か？」

ノブナガの困った顔は暫く元に戻らなかつた

【75】幻影旅団VS陰獣

「ヨークシン外

荒野」

そして幻影旅団と陰獣たちは激しいバトルを繰り広げていた
激しい鎧鳴りの音を立てるフエイタンと病犬（やまいぬ）
蛭の毒を吸いとつて膠着状態になるシズクと蛭（ひる）
針が通らずに苦戦するマチとその相手の豪猪（やまあらし）
念弾の届かない地面にいて場面の動かないフランクリンと蚯蚓（み
みず）

それを見たシャルナーカが動こうと、意識をウボオーから外した瞬間

ジャラ

一瞬で鎖がウボオーに巻き付く

ギュオオオオオオオ!!

その瞬間に、あつという間に引つ張られていくウボオー

「マチ！」

シャルナーカの声に反応して、一瞬で事態を把握したマチ
シユツ

瞬時に針を飛ばす

だが、豪猪（やまあらし）の毛がその針を掴んではたき落とす
「ちつ、やつてくれるじゃないか」

苦々しげに豪猪を見るマチ

それを見たシャルナーカは

「うーん、先に陰獣をやるしか無さそうですね」と、咳いて陰獣たちとの戦いに参戦した
ノブナガもその戦いに入る

そしてそのあとはほぼ一瞬の出来事だつた
グシャリ――

ヨークシン郊外 道路

「…どうだ？」

「——追つ手はないみたい。どうやら大丈夫そうよ」

クラピカに問われて耳をそばだてていたセンリツが答える

「おい、そいつ起きないだろうな？」

運転しながら心配そうにバックミラーへ視線を向けるダルツオル

ネ

「ええ、大丈夫よ。完全に意識を失つてるわ」

「起きても問題ない。奴らにはこの鎖は解けはしない」

心音を聞いたセンリツと、鎖で捉えているクラピカは二人で大丈夫だと念を押す

そんなやり取りをしていたせいか、はたまた普通にしていても気づけたか
クラピカ達の車が通りすぎていくのを、崖の上で見ていた影が7つ
あつた

（ベーチタクルホテル 205号室）

ガラガラ

「よつ、と」

「トランクスくん、お父さんたちまだいない？」

先に入つたトランクスの様子を窺うように窓から顔を出す悟天

「大丈夫、大丈夫。それよりこのカーテンとか片付けようぜ」

「うん、片付けたらそのあとは?」

「どうしようかなあ…」

うーん、と悩み出すトランクス

——やつぱり念が気になるよなあ。まあ今日は遅いし寝とこう
ぜ

バッグの紐を元に戻したトランクスはバフツとベッドに飛び込む
悟天も真似してベッドに飛び込む

そしてあつという間に眠りについた

「ヨークシンのあるホテル地下へ

「ここは？」

「言っていた別のアジトだ。地下のな」

クラピカたちはノストラードファミリーが所有する施設の一つに入り、ダルツォルネから詳細を聞いていた

「拷問器具なども一通りある。覚醒ガスを吸わせたから、こいつももうじき起きるだろう」

クイットと顎でウボオーギンをさすダルツォルネ

【76】追う

（ヨークシン郊外 道路）

「場所わかるある力？」

「とりあえずヨークシン方面に逃げたのだけはわかります。そこまで
はこの街道一本しかありませんしね」

フェイタンにそう答えるシャルナーグ

マフィアの車を盗んだ幻影旅団たちは、ウボオーギンを拐つた者たちを猛スピードで追いかけていた

「それにしてもあのマスク野郎は一体何者？」

マチは直接戦つたノブナガに尋ねる

「…陰獸じやねえ、って言つてたがな…」

「なにそれ？じやあなんで来たの？」

不思議そうに今度はシズクが尋ねる

「知らねえよ。あの2人に聞けよ」

「2人？」

「ああ、多分だが子供2人だな」

思い出しながら説明するノブナガ

「お前さんたちは他の陰獸と戦つてたから見てねえだろうが、あのマスク野郎をぶつた切つたんだよ」

自慢じやねえぞ、と一言告げて続ける

「手応えがないから避けられたと思つたら…2つに分裂して何か話ながら飛んでいきやがつた」

「飛んだ？」

シャルナーグがそこに反応する

「あー、そこはなんだ…、ちよいと驚いて忘れてたが、確かに空を飛んで逃げていきやがつた」

「なぜ子供つてわかるある力？」

「見たわけじやねえよ。ただ声が幼いのと、元々手足が短かつたじやねえか」

ふーむ、と考え込むシャルナーグ

「で、強さは?」

「…団長以上だ」

マチの質問に少し難しそうに答えるノブナガ

「はつ、それはあり得ないね。あんたが弱くなつたんじやないの」

ふざけるなど言外に伝えるマチ

「冗談なんか言つてねえよ。マチ、お前はオレの居合いを止められるのか?」

「なんの関係があんのさ」

「いいから答えろよ」

「…そりや難しいかもしれないけど…あんただつてうちの強化した糸を絶対に切れる保証はないだろ」

ノブナガはポリポリと頭をかきながら、そういうことじやねえんだよなあ、と呟く

「いいか、あのマスク野郎はこつちを見もせずに、オレの居合い抜きを指先で”掴み”やがつた。この意味がわからねえお前らじやねえんだろ」

「それで?パワーはウボオーギン以上あるか?」

静かにしていたフェイタンが口を開く

「速さはノブナガさんの居合い抜き以上、力はウボオーサン以上、そして空を飛ぶ能力ですか?危険ですね…」

危機感を顕にするシャルナーク

その瞬間

ドンッ

ボンネットに人影が見えた瞬間、車が影に包まれる

ザザツ

車から飛び出した4人

「おい!こら!出せ!」

ボンネットに飛び乗った男の手、そこに小さな布が袋状にして包ま
れている

その袋からノブナガの声が響いていた

「…ノブナガは場所が悪かつたネ」

ノブナガは後部座席の真ん中に座っていた
そして街道の横、崖を見上げる幻影旅団の4人
そこには

【77】幻影旅団VS新たな陰獣

「ヨークシン郊外 道路」

崖の上に見える7つの影

「あのノブナガを捕まえてる男、あいつが梟（ふくろう）あるか？」

「だと思いますよ。金庫からお宝を持ち出すにはうつてつけの能力で
すしね」

そう解説し、狙いを定めるシャルナーカ

「待つて。でも人数が合わない」

動こうとする2人にマチが制止をかける

「人数？」

「…ああ、そういうことですね。確かに」

わからないシズクと頷くシャルナーカ

「陰獣は10人。さつき4人潰したから、残りは6人のはずなんだけ
ど」

「そんなことどうでもいいね。こいつらに聞けばわかるね」

力チャ、と剣に手をかけるフェイタン

「まあ今回はそういうことですね」

同意して構えるシャルナーカ

「お相手はどうします？」

陰獣たちを見上げるシズク

崖の一番上にいる長髪の男は様子見のようで気迫も構えも感じら
れない

「多分あの人は最初は動きませんね。ということは6：4」

「ならワタシが2人もらうネ。あとは好きにしたらいいヨ」

「じゃあボクも2人もらいましょうか。先ほどの陰獣は皆さんにお任
せしましたしね」

「じゃあわたしはあの梟（ふくろう）を捕まえるとするよ」

フェイタンとシャルナーカが2人ずつ受け持つと答え、マチは梟の
捕獲を決める

「じゃあ私は…」

シズクが困ったように残りの陰獣を見渡した瞬間
シャツ

一斉に6つの影、陰獣が動いた

キキンッ

瞬きする間で戦闘が開始される

拮抗する幻影旅団と陰獣たち

それを見下ろす長髪の男

(幻影旅団か…結構な強さだが…)

フェイタンと2人の陰獣を見る

(あの小さい黒マントの男、相当な手練れだな。陰獣2人がかりで精一杯…、押し負ける可能性もあるか?)

そしてシャルナーチと2人の陰獣

(こちらは逆に押している…?いや、のらりくらりとかわされているだけか?…あいつの目の動き、全体の状況分析をしているということか)

更に足元ではシズクと陰獣

(こちらも拮抗、か。あの細い女はそこまで戦闘向きでは無さそうだな)

最後に奥に視線を移す

マチと梟(ふくろう)

何かをかわし続ける梟(ふくろう)

目を細める長髪の男

(…糸か!まさか梟が競売品を運んだことを知っている!?捕まえるつもりか!)

まずい!、と動く長髪の男

その動きに髪がなびき、月の光で銀色に煌めく

崖を走るように駆け下りて梟(ふくろう)の加勢に向かう

それを見たシャルナーチ

「いまだ!全員潰せ!」

幻影旅団の4人は一気にオーラを高める
ぎやあ!うげえ!

陰獣たちの断末魔が周りから響いてくる

そして目の前の女が鼻（ふくろう）を糸で絞め上げようとしたその

瞬間

ザツ

手刀で糸を切り落とす長髪の男

（せめて鼻だけでもっ！）

片腕に鼻を掴んで一步下がる

だが、女の足元には鼻（ふくろう）の手からこぼれた布袋が落ちて
いる

ブワツ

一瞬で大きくなり、包まれていた車が現れる

そして車のドアが開き、侍風の男が出てくる

ちらりと視線を左右に移す長髪の男

黒いマントの男も、白い服を着た優男も、掃除機を持つた女も、敵
は全員悠々と立っている

その足元には陰獣たちの亡骸

形成は一瞬にして5：1

（力を隠していたとは…。全員がヒソカと同じレベルの能力者…）

ジリ、と後ずさる長髪の男

そこに侍風の男から声がかかる

「おい、お前さんは何者だ？ オレらの仲間をどこに連れ去った？」
「連れ去る？」

意味がわからず聞き返す

「あー、質問してんのはこっちだ。まともに答えろ」

うつすらと額に血管を浮かべる侍風の男

「ノブナガ、そんなことどうでもいいネ。必要なのはお宝あるヨ」

黒いマントの男は、そう言つて長髪の男が担いでいる鼻（ふくろう）
を指す

「お宝より先にウボオーダラうが！」

ブチツと聞こえる程の怒りを持つて振り返る侍風の男

そこに、まあまあ、と間に割つて入る優男

「まずは聞きましようよ。彼が誰なのか、を」

そして向き直す

(これは…逃れられない、か)

「ある組織の武闘派をまとめている者だ」

うーん、と首をかしげる優男

「そんなに濁さないで下さいよ。彼らがコミュニティの長である十老頭付きの陰獸っていうのはわかってるんですから」

そう言つてにこりと笑つて続ける

「ボクは貴方の立場と名前が聞きたいんですよね」

「嘘を言うかもしれないが?」

「そこは大丈夫ですよ。嘘を見破れる仲間もありますし、勘が鋭い人もいますから」

そしてちらりと女性に視線を向ける
梟と戦つていた糸使いの女だ

(記憶が読めるのか、もしくは嘘かどうかがわかるのか…)

「まあいいじゃないですか、教えてくれても。じゃないと今すぐ攻撃しなくちゃいけませんし」

長髪の男は一息ついて口を開く
「陰獸の統括をしている——」

【78】油断大敵の男

～ヨークシンシティ中心街 カクテルバー～

「あら？ いい男じやない」

グラマスな女性がカウンターに座つた男に声をかける
「見かけない感じの雰囲気だけどどこの出身かしら？」

「出身はしがない荒野さ。普段は西の方の都に住んでるがね」
ふうん、と物珍しそうに見ながら距離を縮めてくる

「き、君こそどちらの出身かなー？ なんて…あはは」

「あら？ 興味ある？」

艶っぽい唇を見せながらしなだれる

（あいつを先にホテルに行かせてて良かつたー！）

「で、お嬢さんは何を飲みますか？」キリツ

「気が利くのね、うふふ。じゃあマティー二を貰おうかしら」
「マスター！ こちらの麗しい女性にマティー二を」キリツ

雰囲気に酔つている男は、チラリと視線を向けたマスターの憐れみ
の視線には気付かなかつた

「この街に来たのはオーケーションかしら？」

「いえ、友人を探しに…」

「あら、そだつたの…。オーケーションをされるお金持ちの方が多い
からつい。お酒は奢りじやなくて割り勘でいいわ」

スツ、と立ち上がるうとする女

「あ、まつ待つてください。大丈夫ですよ。こう見てちゃんと持つ
てますから！」

懐から箱を取り出す男

パカッ

中に入つた大粒のダイヤを見せる

「わあ、とつても綺麗だわ」

いつの間にかしつかりと座つている女
心なしか男に胸を押し付けて

（むふつ）

「今日はもう少し飲みたいな…」

意味ありげにそう呟く女

「実はボクもなんです」 キリッ

「ねえ、この店内…人目が多くて嫌だわ。外のテラスにしない？」
お店の外にあるテラス、その端のテーブルに視線を送る
ちょうど死角で人目にもつきにくく

「マスター、外のテラスで飲んでもいいかい？あと、シャンパンをボトルで」 キリッ

「いいんですけど…大丈夫ですかいお客様さん」

「まだまだ飲めますよ」 キリッ

マスターは何の心配をしたのか

だが男はそう答えたのだつた

「ヨークシン郊外 道路」

「陰獸の統括をしている——カストロだ」

優男は女の方を見る

糸使いの女はその視線を受けて頷く

「成る程ね。嘘は言つてないみたいだね」

その間にもカストロはどこかに隙はないかと目配せする
だが、幻影旅団たちに隙はない
頬を汗が一筋流れて、落ちた

「ベーチタクルホテル 8011号室」

「成る程なあ。そんな能力使つてたんかあ」

ベジータからヒソカの能力を聞いて納得する悟空

「念を使う奴らは根本的に氣を使う奴らとは戦い方が違うからな」

「けどフリーーザもブウも超能力使うから一緒にえなもんじゃねえか。大変だつたけど勝てたんだしさ」

ちつ、と舌打ちするベジータ

（まるでこの前までの自分を見てるようだぜ）

「な、なんだよベジータ怒るなって」

「相手の気をはるかに上回つたら力で勝てるだろ。だがオレ様が言つているのは”同レベルの奴”と戦つた時のことだ」

「く、工夫して勝つんじやねえのか…？」

「だからその工夫の仕方を話してきただろうが――――!!!」

ベジータの怒声が上がる中

ゴンたちは、早く自分の部屋に戻つて欲しいと思い始めていた

【79】光の玉

「ヨークシンティ中心街 カクテルバー」

「いやー、こんな綺麗な人と飲めるなんてボクはついてるなー、なんて」あはは

「ほんとお世辞がお上手ね」

テーブルの上には空のシャンパンが何本も並んでいた
男はだいぶ酔っているようで、顔も赤く上機嫌
女はグラスに口をつけるが、一向に減っていなかった

「そうそう、綺麗と言えばオークションの最終日には花火が上がるそ
うよ」

「花火なんかより貴女の方が何倍も綺麗ですよ」うへへ

「あ、ありがとう。でも花火は綺麗よ。見たいわあ」

そう言いながら女は男のグラスになみなみと注ぐ
話題を作りながらとにかく飲ませ続けていた

「花火ならボクも打ち上げられますよ」ニヤツ
女性の頭に?が浮かぶ

「お仕事は花火師か何かだつたかしら…?」

「いえいえ、ただの武道家なんですけど。よつ

ぽんつ

男の手のひらから光輝くものが出て浮かぶ

「…………なにこれ!?

色っぽい余裕なイメージが消え去り、驚く女性
そのまま男は上に投げる動きをする

それにつられて上空に飛んで行つた光の玉
そして男が手のひらをぎゅっと閉じて握りこぶしにした瞬間

パン

上空で光の玉が弾けて消える

「…綺麗」

「と、まあこんな感じで」へらつ
赤らんだ顔でにんまり笑う男

「凄い！…どうやつたの!?」

男の腕を胸に引き寄せて喜ぶ女性

「普通の人には無理なんだけどね、ボクには簡単かなーなんて」あはは
はは

見せて見せてとせがむ女性

「んじゃもういつちよいきますか」でへへ

手のひらから5つの光の玉を作り出す

くるくると体の周囲を回ると、そのまま螺旋を描きながら上空へ上
がる

「すゞーい！文字とかも書けるの!?」

「も、…もちろん！」

男は酔った頭で一生懸命操作する

光の玉を高速移動させて、その残像で文字を空中に描く

頭にアルコールが登つてふらつくが、女性の胸が体を支えていて心
地良い

(むふふつ)

気が抜けた顔をしながら、4つのハートを描く

そして最後に同じく弾けて消える

女の喜ぶ顔を見ながら、注がれるシャンパンに酔いしれる男

一瞬で感動の感情を抑え込んで男の懷に手を伸ばす女

どちらも、出した光の玉が5つ、弾けた光の玉が4つだとは気づいていなかつた

（

♪ヨークシン郊外 道路♪

「じゃあ改めて話を整理しよう」

幻影旅団の優男はそう言つて指を2つ立てた

「ボクらが知りたいのは、拐われた仲間の行方。そして隠された競売
品、お宝の在りか。この2つなんだよね。できれば両方知りたいんだ
けど」

「君たちの仲間のことは本当に知らない。競売品のことについては盜賊には教えられない」

またチラリと糸使いの女を見る優男

「うーん、本当に嘘じやないみたいなんだよね」

「ねえ、あたし思うんだけどさ。拐った奴は陰獸とは関係ない気がするんだよね」

「うん、その可能性は大いにあると思つてるよ」

糸使いの女の言葉に頷き、推論を続けて述べる優男

「陰獸は10人。あっちの荒野で4人、ここで5人潰して、目の前にいる男に担がれてるのが1人。これで10人。なら連れ去つたのは違う組織かもしね」

「まあとりあえず半殺しにしてお宝の場所吐かせればいいネ」
結論は変わらなかつた

（もうここまでか…。だがただではやられはせん！）

オーラを練り込むカストロ

それに反応して動く幻影旅団
その瞬間

【80】心のすれ違い

「ヨークシン郊外 道路」

ドオオオオオオオオオ

凄まじい衝撃がカストロと幻影旅団の間に起こる

全員その場から吹き飛ぶ

「な、何が起こった、ある力」

頭を抑えながらふらつくフェイタン

「ぐつ…。わかり、ません」ガハッ

血を吐いて腹部を押さえる

爆心地に近かつたシャルナーカはまともに衝撃を受けた様子

「内臓、やられた、ある力」

周りを見渡すフェイタン

「マチ、シズク、…は完全に、意識ない、あるネ」

1人、ノブナガだけは刀を杖代わりにして立っている

「ちつくしょ…、なんだ、あの光の玉…」

「光の玉…、言われて、みれば、見えた、気がする…あるネ」

衝撃が起こる一瞬前、カストロと自分達の間に光る玉が見えたような気がしていた

「ヤツの、技、ある力…?」

「わからねえ…。だが、フランクリンの、やつみみたいな放出能力、だつた」

「威力が、桁違い、あるヨ」

そして相手、カストロを探し始めた

カストロも同じく、衝撃により吹き飛んでいた

幻影旅団たちとは反対方向の崖側

（何が起こつた…？いや、私は見たはずだ！あれは師の繰気弾…！私を助けてくれたのか！）

膝付き状態から立ち上がる

爆心地が幻影旅団寄りだつたこともあり、幸いダメージは大きくな

「師匠！…どこです!?」

声を張り上げて師、ヤムチャを探す
だが反応はない

「なぜ答えてくれないのでですか!?」

神経を研ぎ澄ませてみても、師を見つけることができない
(助けられたのに…お礼も言わせてくれないなんて…。でもなぜ姿
を現してくれないのか…? それに師なら私にダメージを与えること
なく敵を倒せたはず…なぜ…?)

わからないことだらけで困惑するカストロ

そこに

ブワツ

煙を搔き分けるように敵が現れる

「ここに、いたネ！」

ガギンツ

フエイタンの剣をカストロの手が抑え込む
(なぜ敵がまだ生きている!?)

「ワタシの、剣、止められるの、ムカつくあるネ」

虎咬拳を極めたカストロには刃は通らない

(な、ぜ…敵…が?)

「ど、見てる、あるカ」

ガギンツ キンツ キンツ

猛烈なフエイタンの剣捌き

一瞬でも手に集めたオーラを緩めればあつという間に切られる
だが、カストロの頭は疑問と疑念でいっぱいだった
スウウ

その意識がオーラを緩める

シユツ!

フエイタンの剣がカストロを両断するように振り下ろされる
剣が眼前に迫ったその瞬間

キイン

もうひとつの方がカストロの顔前に差し出されてフエイタンの剣

を止める

「なんの、つもり、ある力？」

剣を止めたのはノブナガの刀

「殺すな。何でもいい。ウボオーに、繋がるかもしだねえんだ
だいぶ息が整ってきたフェイタンとノブナガ

「無理ネ。こいつ、かなり強いあるヨ。生け捕りできるような、ヤツ

じやないあるネ」

「強さなんて、どうだつていいんだよ。ウボオーのこと知らなかつた
としても、もしかしたら取引材料になるかもしだねえ」

目の前で睨み合う幻影旅団の2人

（…いまは師のことより鼻を連れ帰ることが優先！）

カストロは右手にオーラを集め

「——繰氣弾！」

ブウウウウウン

手のひらに現れる光の玉

フェイタンとノブナガは一瞬で距離を取る

「ヤツの技だつたある力。非常に厄介あるネ」

珍しく顔を曇らせるフェイタン

「ああ、こいつはやべえな…。あんな技を何発も出せるたあな…」

ノブナガも握る刀に汗が滲む

「はっ！」

ヒュヒュン

カストロは繰氣弾を動かして幻影旅団の2人を狙う

フェイタンとノブナガは先ほどの爆発の威力を警戒して大きく避
けるしかも、隙が出てくる

カストロはジリジリと下がりながら操作する

「このままだと逃げられるあるヨ」

「と言つても、こいつがある限り追えねえ、だろ！・おつと」

ヒュン

ノブナガの鼻先を掠める光の玉

そして——

「もう、無理あるネ」

カストロの姿が見えなくなつた

「ちつ、くそつ！」

それと共に光の玉も消えていく

カストロはヨークシンの中心へ向けて走つていた

陰獣の梟（ふくろう）の保護と、十老頭への陰獣全滅、そして敵が

幻影旅団であることの報告をする為に

だが、心はそこになかった

（なぜ師は敵を助けた…。なぜ私を助けに出て来れなかつた。師は…変わつてしまつたのか…。幻影旅団に味方した師を…私は…）

ぐつ、と拳を握り締める

「師が悪の道に落ちたのなら…私が倒さねば！」

決意をもつて顔を上げたカストロ

そこには1人の男として立つた厳しい顔があつた

【8-1】 気づかぬは1人だけ

ヨークシンシティ中心街 カクテルバー

ゆさゆさ ゆさゆさ

「ちよつとお客様。起きてくださいよ」

ゆすり起こされて目を擦る男

「…ふあああ。あれ? マスター…?」

「もう閉店時間ですよ」

マスターは時計を指しながら男に閉店を告げる

「あー、寝ちゃつてた…?」

「あんなに飲むから…。お会計して早くホテルに戻つて下さいよ」

そう言いながら水を差し出すマスター

受け取つて口を付ける

「あれ…? 女性は…?」

キヨロキヨロと辺りを見回す男

「もう2時間以上前に帰つてますよ」

はあ、とため息をつくマスター

「お会計、53万ジエニーですよ」

「……。53万ゼニー!?

目が醒める男

「そりや…あれだけ高いシャンパン飲まれたら…」

そう言われてテーブルを見る男

空き瓶が8本転がっている

どれも良い値段のする銘柄だ

「あちゃー…。あるかな…」

ガサゴソとお尻の方から財布を取り出す

「……。ない」

現金が1枚も入つていな

小銭すら入つていな

「う…そ…だろ…?」

「お客様、やられたみたいですねあ」

憐れみの目で見るマスター
その慰めの視線で気づく

「あの……女！」

ガタン、と立ち上がった男だったが、マスターが腕を掴む
「どこに行くんですかねえ」

「いや、あの、女を捕まえようかと…」
「お勘定済ませてからでお願いします」

丁寧だが有無を言わせない態度のマスター
「でも…」

と、言いかけた時

相棒の言葉が脳裏をかすめる

『いいですか？何かあつたときの為にこの靴底にクレジットカード入
れておきますからね！でも、そんなことがないようにしてくださいね
！』

はつ！として靴を脱ぐ男

右の靴…にはない

左の靴を確かめる

「あつた！カード！クレジットカードだつ！」

小躍りしながらマスターに渡す男

マスターは受け取つてレジへ行く

——だが

「このカード、限度額いくらですかね？決済通らないのですが
ジトリとした目で見るマスター

「…50万ゼニーだつたような…」

「3万ジエニー足らないですよお客様」

上げて落とされた感じである

いや、まだある！と懷を探る男

懷を探る男
懷を……

……

(ない!!ダイヤがない!!)

現金だけでなくダイヤも持つていかれていた

「あ、あはは。50万ゼニーになつたり…しませんかね？」

「無理だね。カードで50万ジエニー切るから残りの3万ジエニーはここで掃除でもして返してもらおうかね」

「そ、そんな…」

そして男は雑巾を渡された

その頃、男の相棒は

「遅いなあ…大丈夫かな…」

窓を開けてヨークシンの街を見下ろし、主人の心配をして待ち続け
ていた

【82】囚われの男

「ヨークシンのあるホテル地下」

「目が覚めたようだな」

ダルツオルネの問いかけにぼんやりと目を開けるウボオーギン

「こは？」

「オレたちのアジトの一つだ。競売品をどこへやつた？」

そう言うとダルツオルネは刀を取り出す

「どれくらい眠つてた？解放するなら生かしておいてやる」

寝台に完全拘束されていても関わらず、あくまでも自身の立場が上であると言わんばかりの態度

「質問をしているのは……つちだ！」

ガキイイン

突き立てた刀はウボオーの肉体に弾かれる

（な……なんて野郎だ……）

後ずさるダルツオルネ

「誤解だ。オレたちは競売品を盗んでない。既にもぬけの殻だつた」

平然と言うウボオー

「う、嘘は言つてないわ……」

その心音から判断したセンリツがクラピカに言う

「じゃあ会場の客はどうなつた？我々の仲間もそこにいたんだが」「殺した。そういう手筈だつたんでな」

悪びれることなく言いきつたウボオーに
ドガアア！

「ふざけるな！」

顔面を殴り付けるクラピカ

鼻が曲がつて血を流すウボオー

「お前たちの都合で殺された者たちはどうなる！・」

「そこまでだクラピカ」

間に入つて止めるダルツオルネ

「一時間以上前にコミュニティに連絡は入れてある。もうすぐ引き取

りに来るだろう」

「そうよクラピカ。あとは任せましょう」

センリツも止めに入り、クラピカの背を押して地下室を出る

残されたウボオーは鼻から流れ出る血をペロリと舐め、猛烈な怒りと共にクラピカの出て行つた扉の先を睨んでいた

「どんなに強がつてももう少ししたらお前を迎えにコミュニティの者が来る。貴様は終わりだ」

そう告げたダルツオルネは折れた刀を置く

そして地下室を出たセンリツは、アジトとして確保していた上階の部屋へとクラピカを連れて行つた

――それから20分程後

「ようやく来てくれたか。待っていた」

地下室の入口を開けてコミュニティからの使者を迎えるダル

ツオルネ

「幻影旅団はどこに?」

そう急かす使者に

「こちらだ」

と案内をする

そして捕らえたウボオーのところまで來たとき

「ふん、馬子にも衣装だな」

そうウボオーが言つた瞬間

ドスツ

ダルツオルネは腹部に熱いものを感じて下を見る
腹部には突き刺さった手

「ま…さか…」ゴフツ

そして倒れ込む

「つたく、お前が拐われたと聞いたときは耳を疑つたぜ」

コミュニティからの使者たちは幻影旅団が化けた者たちだった
ウボオーの拘束を外す幻影旅団

「くつそおおおおお!!」

雄叫びと共に起き上がるウボオー

「あの鎌野郎許さねえ。そしてマスク野郎もだ。団長に伝えてくれ。
オレは鎌野郎とケリをつけるまでは戻れねえとな」
ギリギリと歯噛みしながら鬪志を滾らせていた

——そしてクラピカたちは

ウボオーの雄叫びを聞いて、すぐさま別のアジトへと移っていた

♪ヨークシンシティ 空き家♪

「見つかったか？」

パソコンを覗き込むウボオーギン

「あともう少しですよ」

ウボオーの為に、鎌野郎の居場所を調べているシャルナード

「あの地下施設はノストラードファミリーのものですね。ならあとは
そのファミリーに所属している組員と、所有している物件を当たれば
⋮」

カタカタ、つとキーボードを打つ

「あれ? これ以上はハンターライセンス必要ですか?」

よつ、と腰を浮かせてポケットからカードを取り出すシャルナード
「ウボオーさんも取つたらどうです? ハンターライセンス。いろいろ
と便利ですよ」

「オレあそんなの取りにいかねえ。必要なら盗むさ」「
盗賊の鑑ですね。と、出てきましたよ」

画面にノストラードファミリーの組員の顔一覧が表示される

「こいつだ!」

画面を指差すウボオー

「ノストラードファミリーで当たりですね。アジトは3つ。どれを当
たります?」

「全部だ。地図を出してくれ。オレ一人で行く」

「気をつけて下さいよ。はい」

地図を受け取ったウボオーは窓から闇夜に抜けて行つた

【83】クラピカVSウボオーギン（前半）

「ノストラードファミリー所有アジト」

ザツ

「——來たか」

「よお。良い度胸じゃねえか」

一人部屋で待っていたクラピカ

ウボオーギンはクラピカを睨む

「オレとやる気満々って感じだな」

「場所を変えよう。貴様の断末魔はうるさそうだ」

ピクツ、と眉を動かしたウボオーダつたが、狭い室内で闘うより、全力を出せる荒野の方が都合が良いのもその通りだつた

「いいだろう」

そして2人はヨークシンの郊外へと向けて移動して行つた

「ヨークシン外 荒野」

「一つ聞きたい。お前何者だ？並の使い手じやねえ。お前の念には特別な意志が感じられる」

ペキヨ、と飲み物の缶を潰しながら問うウボオー

「その質問に答えるには、聞き返さなければならぬことがある」

そう言いながらバサリとコートを脱ぐ

「殺した者たちのことを覚えているか？」

「少しほな。印象に残つた相手なら忘れねーぜ。⋮つまるところ復讐か。誰の弔い合戦だ？」

「クルタ族」

ポツリと呟くクラピカ

「？知らねえな」

「緋の目を持つルクソ地方の少数民族だ。5年ほど前にお前たちに襲われた」

「ヒノメ？なんだそりや？お宝の名前か？悪いが記憶にねえな、5年前ならオレも参加してるはずなんだがな」

悪びれもせず、平然と答えるウボオー

スツ、とクラピカの雰囲気が変わる

「およそ関わりのない人間を殺すとき、お前は…お前は一体何を考え、何を感じているんだ？」

ジリ、と一步近付く

「別に何も」

その感情のない回答に、クラピカの雰囲気は完全に変わる

「クズめ」

そうポツリと呟いたあと、顔をあげて言う

「死で償え」

そうクラピカが宣告した瞬間

ゴツ!!!

ウボオーがオーラを爆発させる

ゴゴゴゴゴゴ

「たまにこういう奴がいるからやめられねえ。殺しはな」

「返り討ち、か」

「はつ、わかってるじやねえかよ」

「いつまでも返り討ちにできる相手ばかりだと思わないことだな。あのマスクの男のように」

カツ、と怒りの表情を込めるウボオー

「――あいつは、オレが殺す！そしててめえもな!!」

「ふんぬ！はあっ!!!

「くらえつ！破壊弾ん!!」

ボツ！という音と共に岩が飛ぶ

それを飛んで避けてすぐさま反撃するクラピカ

「束縛する中指の鎖（チエーンジエイル）」

中指に付けた鎖がウボオーをからめとろうとする

バツ

デュイイイン ドオオオオオン

紙一重で避けたウボオーの足元に鎖が当たり、地面を砕いて轟音を立てる

(この鎖がやばい！どんな手品を使つたかわからねえが、通常じや考えられない程の念があれに込められてやがる)

ヒュヒュ

クラピカの操る鎖を避けながら考えるウボオー

(と、くれば…！)

思考を終わらせてクラピカを見る

(先手必勝!!!)

飛び上がつていたクラピカ目掛けて右ストレートを叩き込むズガツ!!!

ガードしているクラピカの左腕を殴り付けたウボオー

「手応えあり！」

だが――

ヒュオ！

殴られた反動を利用して鎖が飛んで来る

「くつ…！」

上半身を反らしてかろうじでかわすウボオー

「驚いたぜ。今のパンチをくらつてなお、攻撃してくる気力があるとはな」

(だが左腕はイカれちまつたはず…)

そう判断していたウボオーの前で

ポンポン

左手を使って服についた砂ぼこりを払うクラピカ

(無傷!?ばかな！)

驚くウボオー

(鎖にあれだけの念を込める事ができるのは物体を操る操作系かオーラを物體化する具現化系！奴はおそらく前者！しかしオレの拳を生身で防御可能なのは肉体をオーラで強化できる強化系ぐらいのはず!!奴は一体…)

そう思考していたウボオー

そこにクラピカが口を開く

「今⁷のパンチ」

そう言うと同時に顔をあげて鋭い視線を向けると同時に続ける

「まさか全力か?」

カツ!

目が血走るウボオ一

「くくくくくくくくく。…面白くもねえ冗談だな!? 安心しろ2割程度だ。じゃあ半分くらいの力でいくぜ!」

そしてウボオーがオーラを込めた時

荒野の崖の上に人影が一つ

スウツ、と表れる

気配を完全に消して二人を見下ろす影

戦闘中の2人は気付かない

大胆にも崖に腰をかける

逆に月明かりによつてできる影を小さくしているのか

だが、ニタリと笑つた不気味な雰囲気は周囲の生き物を瞬時に遠ざけていた

【84】クラピカVSウボオーギン（中盤）

「ヨークシン外 荒野」

ザウツ！

地面を蹴つて一足飛びにクラピカに殴りかかる

ブンツ

だがウボオーのパンチは当たらない
ゴツ！

一瞬で後ろに回り込んでいたクラピカがウボオーの後頭部を殴る
そしてそのまま、バキッ！つという大きな音と共に背中を蹴り飛ば
すクラピカ

衝撃で、ズザザツ！と押されるウボオー

（このつ…！）

振り返ったウボオーの目には何もない荒野しか映らない
ドウツ！

（グツ…上かつ！）

後頭部を蹴り飛ばされたウボオーは即座に上へ拳を突き出す
「らあつ!!」

スカツ

だがそれもかすりもしない

気づくとクラピカは目の前に居た

「ちよこまかと動きやがつて。だがな——」

「今のは隙に鎖でオレを捕らえなかつたことを後悔するぜ』か？』
ウボオーの思考を読んだように、先読みして言葉にするクラピカ
「くだらん負け惜しみはやめて全力でこい。時間の無駄だ』
そう言われてこめかみの横に青筋を浮かべる

「やつてやるぜ——全開だ!!」
カツ!!!

その頃、戦う2人を見る男は

「いいね……これからが本当に楽しくなるところ◆」

崖の上でほくそ笑む

月が雲から顔を出し、男の顔を照らす

ピエロメイクの男、ヒソカ

「さて、どつちが勝つのかな?◆」ククク

ズオオオオオオオオ!!

激しいオーラの爆発と共に、幾層にも練り込まれた強靭なオーラを纏うウボオー

「ふむ……凄まじいほどのオーラだ」

これだけのオーラを目の当たりにし、彼我のオーラの差は明らかであるにも関わらず、平然と観察するクラピカ

動いたのはウボオーから

ドオツ!!!

地面を殴り付け土埃を立てる

(目眩まし!?)

一瞬で巻き上がった土埃に、目を庇う

――!

(気配が消えた!『隠』!)

そう判断した瞬間

ヒヨオ

土埃を搔き分けてウボオーが現れる

反応の遅れたクラピカは避けきれず、左腕を上げてガードを滑り込ませる

そしてそこに渾身の右ストレートがクラピカに突き刺さる

ベキイ!!バキ!ボキ!

衝撃と、そこからの押し込みで骨の碎ける音が響き、そのままの勢いで吹き飛ばされる

「今度こそ!碎いたぜ!」

怒りと笑みの混ざった顔をしながら続ける

「本気を出したオレの超破壊拳を生身で止められる奴なんぞいねえ！だが褒めておくぜ！確実に背骨がぶち折れるはずの攻撃だつたのが、お前のあの反応の速さ！おそらく土埃の微妙な変化を目の端で捉えたな!?」

ピタリと空中で静止しているクラピカは、それを聞いても平然としていた

「こちらこそ褒めておこう。まさか『隠』を使えるとは思わなかつた。地面を叩き、土埃を上げたのは体だけでなく気配を絶つて攻撃する作戦だつたわけだな」

(…なぜ空中に!?)

ウボオーがそう思う間もなく、クラピカは続ける

「だが、『隠』を使えるのは私も同じ」

——!?

ピキイツ

「まさか…！」

瞬時に『凝』をするウボオー

“束縛する中指の鎖”

「見えたか？『凝』も使えるようだな」

じやらり、とウボオーの全身を絡め取つている鎖

その鎖の力で空中に静止していたクラピカ

地上に降りながら先の戦闘を解説する

「この鎖は念能力でオーラを具現化したもの！したがつて、『隠』で見えなくすることも可能！」

【85】クラピカVSウボオーギン（後半）

♪ヨークシン外 荒野♪

そこまでのやり取りを見ていた崖の上のヒソカ

「ふーん、何かおかしいね」

陽気な雰囲気は消え、少しばかり目が細まる

幻影旅団と共に行動していたヒソカ

もちろん、ウボオーギンという男のその強さも知っている
ピピピッ

『2213…1564…774…221』

（2213から221まで下がつた…？）

鎖を巻き付けられたウボオーの戦闘力が激減したのをスカウター
が拾う

（この状況下で彼がオーラを消すはずはない…。ならクラピカの鎖に
秘密があるのかな◆）

ゾクゾクツ、と何かが込み上げてくる

（強制的にオーラを絞り取っている、といった辺りかな◆）

だが、それよりもヒソカには気になっていたことがあつた

（それでも…、彼の攻撃にクラピカが耐えられていることがおかしい）

そう、スカウターにはクラピカの戦闘力も表示されている

『817』

（最初は47、そしてオーラを高めて384、それが急にまた上昇して
817。けれどそれでも差がありすぎる…）

ヒソカは冷静に分析する

ウボオーの戦闘力『2213』が本物なのは、その戦いぶりから
知っている

（比較するならベジータ辺りかな。彼は1000程度だつたけど、念
の質が違うのか…強さとしては2倍くらい、2000程度の戦闘力が
あると感じた――）

そんな力を受けて800程度のクラピカが平然としていられるわ
けがない、と

「ちよつと、気になるんだよね……◆」

そう小さく咳くと、ヒソカは更に目を細めてクラピカたちの戦いに注目し始めた

そしてクラピカとウボオー

「お前が普段も鎖を具現化してたのは……本物の鎖に見せかけるためか！」

そう推察したウボオーに回答を述べる

「その通りだ。」実在する鎖を操る操作系能力者を装つておけば、敵は見える鎖にだけ注意を払うだろう？」

そして続ける

「まさに今それが証明された。お前がくだらん強がりを言いかけた時、既に鎖はお前の体を覆つてたんだよ」

そして完全に念を込め終わる

ビシイツ

ちようどヒソカがスカウターで数値を拾つたタイミングだつた
「捕獲、完了」

クラピカはそう静かに呟いた

「なるほど◆…絶、か」

クラピカの能力を見抜いたヒソカ

(厄介な能力、そしてあまりにも強力すぎる…制約か。その内容によつては諸刃の剣◆)

ククク

「さて、…ボクはどうしようかな？」

そう咳きながらも、ヒソカはスカウターに集中していた

ウボオーはギリギリと力を込めて鎖を外すことを試みる
それを見てクラピカは言い放つ

「無駄だ」

「——いいぜ、オレの力とお前の鎖、どちらが強いか勝負だ！」
「貴様ごときにその鎖は外せん」

「うおらあ！」

「ぐつ、グギギギギ!!」

だが、鎖は全く外れる気配もない

「無駄だと言つただろう。束縛する中指の鎖（チエーンジエイル）は捕らえた旅団を強制的に”絶”の状態にする！その上で身体の自由を奪う！」

（くつ、それでか。さつきから全然オーラが出せねえのは！）

「ぬうう！」

ギリギリ

それでも力を込めるウボオー

「オーラが全く出ない状態”絶”。つまりこの鎖に捕らえられた者は、肉体の力のみで鎖を絶ち切らねばならない」

そう、クラピカは順当に選んでいた

幻影旅団の中で一番の力を持つ者、ウボオーギン

ウボオーがこの鎖をほどけなければ、旅団全員が捕獲可能ということになる

また、念の系統としても強化系のウボオーはクラピカにとつて相性が良い

そして、まだ抵抗を試みるウボオーにクラピカは畳み掛ける
「捕らえておくだけではない」

ジャラ、と親指の鎖を具現化する

“癒す親指の鎖（ホーリーチエーン）”

クラピカの折れた右腕に鎖が巻き付き、一瞬で完治させる

（——バカな！これ程の鎖を作り出せるのは、奴が間違いなく具現化系であることの証！強化系能力者のような強力な自己治癒力が出

せるはずがない！）

「くそおおおー！てめえ…一体!?」

「緋の目になつたいま、私の系統は特質系」

そして――

「特質系の私の能力『どの系統の能力も100%引き出せる』そして『
氣』すらも使える！」

『絶対時間（エンペラータイム）!!』

「さて、では答えてもらおう」

左こぶしに氣を溜めるクラピカ

「幻影旅団のアジトはどうだ！」

「知らねえな」

「仲間の能力は！」

「へつ、知らねえ」

「答えろお!!!」

ドゴオツ!!!!

メキメキボギッ!!

クラピカの拳がウボオーの腹部にめり込む

（――ま、ずい…内臓に…肋骨…背骨まで…折れ――）

あまりにも強烈な氣の拳で、一撃で沈むウボオー

「まだだつ！」

クラピカは倒れようとするウボオーの顎を掴み、ガツ！と揺さぶる

――ぐつ……

かろうじて左目だけをうつすらと開けるウボオー

「最後の、チャンスだ！ぐつ…」

なぜか辛そうにする

「こた、え…ろ――や、はり…氣は、難し、かつた…か――」

フツ、とクラピカのオーラが消える

そして意識を失つてゆらりと倒れる

ウボオーも既に意識は途絶え、無くなつた鎖から解放され、その場
に倒れ込んだ

「うーん、意外な結末◆」

スウツ、と立ち上がるヒソカ

(ウボオーの『絶』状態の戦闘力は221、クラピカの戦闘力は81
7。・3。6倍にしては威力が桁違い。まるでベジータのパンチを
見ているようだつた)

そう思案しながら崖を降りる

そしてクラピカとウボオーの元へ

(…完全に2人共意識を失っているようだね)

「――さて、どう使おうか◆」

薄気味悪い笑みを浮かべ、クラピカとウボオーを担いだヒソカは闇
夜へと消えていった

トヨークシン郊外 旅団アジトト

「まだウボオーが戻っていないんだよね」

シャルナードが団員たちの前で説明をする

「鎌野郎を追いかけて行つたはいいけど、あれからもう3時間経つて
る」

「まさか、やられるわけないよ」

マチがウボオーの戦いを思い出しながら言う

「当たりめえだ」

同調するように言うノブナガ

だが、団長クロロは言う

「いや、その鎌野郎の能力次第だな」

「鎌を使うなら操作系か具現化系じやないかな?」

そう言うシャルに頷きながらクロロは推論を述べる

「十中八九、具現化系だな。強化系一途のウボオーには一番やりにく
い相手だ。具現化した鎌に麻痺の能力を付けたりしていればウ
ボオーでもやられる可能性はある」

「どうすんのさ」

そう言うマチに

「——明日まで待つてみよう。もし帰つてこなかつたら…：作戦変更だ」

そう言つて団員全員を見渡す

その視線を受けて、1人縮こまつっていたウーロンは更に身を強張らせる

そして――

長かつた9月2日が終わりを迎えた

【86】地下競売への誘い　〃 9月3日〃

9月3日

「ヨークシン路地」

「さ、今日も気合い入れてやろうぜ！」

昨日と同じく、レオリオとゴンたちは路地で腕相撲の条件競売をしていた

ダイヤモンドを手にいた男の話が出回っていたのか、朝から多くの人がかりができている

——はい、次の方！

次々と勝っていくゴン

それが100人近くにならうとした頃

「おい、次はオレの番だ」

2mはあるかという、レスラーのような体格の大男が名乗り出る
スーツ姿という点、そしてもう1人柄の悪そうな男が後ろにいるのがいかにも怪しい

ズシツ

椅子に座つてゴンに腕を出す大男

だが、あまりにも体格が違いすぎて腕相撲をするための手が組めない

「おいおい、どうやつてやんだ？ああ？」

そうドスを効かせる大男

そこでレオリオがスッと前に出る

「オレがやる」

その言葉に大男の後ろにいた男が反応する

「おいおい、兄ちゃん。こねる気はねえがそれはルール違反なんじゃねえのかい？」

もつともな問いに、レオリオはドンツと300万ジエニーを机に置

く

「ダイヤにプラスして300万ジエニーも付ける。これでどうだ？」
チラツと振り向く大男

それを見て頷く男

「じゃあ始めようぜ」

そう言うとレオリオは席に着いて大男と手を組む

「んじやはじめるぜ？レディー…ゴツ！」

キルアがそう言つた瞬間

ゴツ!!!

一瞬で、大男の腕がレオリオ側にあり得ない角度に曲がる

「お…あ…あ」

自分の右腕を抱えながらふらつく大男

そしてその腕相撲の様子を見ていた挑戦待ちの男たちは一目散に

後ずさる

「ちつ…商売あがつたりだぜ しゃーねー店終まいすつか」

ポリポリと後ろ頭をかきながらそう言うレオリオ

そこに先程の大男の連れの男から声がかかる

「いやー、兄ちゃん強いねえ」

近づきながら名刺を取り出す男

「後ろの2人はもつと強いぜ」

レオリオはゴンとキルアを指す

「——どんぐらいだ？」

スツ、と目を細める男

「こんくらい、——は簡単だな」スツ

そう言つて名刺を見せるレオリオ

そこには男が渡そうとしていた名刺が

まだレオリオとの距離は3m以上

名刺もケースから出そうとしたところだつたはず

「本当に出来るようだな。その名刺の場所に来な」

それだけを言うと、大男に肩を貸して路地裏へと消えていった

「かかつた魚はでかいかな？」

レオリオはにやりと笑つて名刺の裏を見ていた

「ビスカ森林公園」

その頃、悟空・ベジータ・悟天・トランクスの4人はビスカ森林公園に出掛けていた

「お父さん、ここで何するの？」

「何か美味しい生き物いねえか探すんだ」

「あの時の豚はもういないようだな」

「パパ、あの時の豚って？」

4人はオークションで購入した商品が届く9月4日までの間、ハンター試験で食べた美味しいもの巡りに行っていた

その間にヨークシンシティで大変なことが起こるとは露知らず

……

【87】条件付きかくれんぼ？

ヨークシンティ中心 あるホテルのフロア
十老頭たちは顔を付き合わせていた

昨晚、陰獣の梟（フクロウ）を抱えて戻ってきたカストロ

怪我的具合は酷くはなかつたが、その口から聞かされたのは『他の

陰獣全滅』の言葉だつた

他にもたらされた『幻影旅団かもしけない』との情報は、まだ完全な確認ができていない為、結論は横置きされていた

こんなに何度も集まることはないな、と思しながらも、十老頭たちは朝から円卓に集合していた

「昨日の話はもう聞いた者もいると思う。——梟以外の陰獣は全滅した」

そう口を開いたのは初老の男

ざわつ、とざわつく円卓

自分達の安全は大丈夫か!? 敵は倒せるのか!?

各々が自分勝手に話はじめる

初老の男は手でそれを制して、そして全員を見ながら言う

『我々の安全はここにいらっしゃる先生が守ってくれる。そして敵に對しては、昨晚のうちに先生以外のプロの殺し屋を雇つた』

それを聞いてカストロが反応する

「聞いていなかつたのですが…。一体どのような者を」

――ゾルディック家の者だ

一瞬溜めを作つて口にした初老の男

「あのゾルディック…」

殺し屋として有名なその名前を聞き、眉をひそめるカストロ

そしてもう1人の男も眉をひそめていた

先生と呼ばれている男だ

「ちよつといいですか？ ゾルディック家の誰を呼んだのか、まさか

あのジジイは呼んでないでしような？」

急な問いかけに初老の男は困ったように言い淀む

「…ゼノ先生のこと、でしようか…？」

「もちろんだとも」

「呼んではまずかつたでしようか…？」

「そうか、もう呼んでしまつたか」

苦々しげに咳く男

何か因縁があるのか、それとも

男は静かに三つ編みをいじりながらどこか遠くを見ているようだつた

そして——微妙な空気が流れる中、会議は終わつた

「ヨークシン裏路地 地下」

「なにここ」

裏路地にある小さなビルの階段を下りたゴンたちの目の前には、およそビルの敷地面積の数倍はあろうかという地下ホールが広がつていた

地下ホールはボクシングやレスリングでお馴染みの、試合会場のような出で立ち

“レディース＆ジエントルメン！”

急に舞台の上から派手な格好をした司会者がマイクで話はじめる

“今回の条件競売は！「かくれんぼ」でござります！”
ざわざわつ

“皆様には、このヨークシンシティに隠れている者たちを捕まえて頂くのが条件です！参加費用は500万ジエニー！”

そして、と続ける

“捕まえた者1人あたり、20億ジエニーをお渡します！”

おおおおおおおお!!!!!!

大歓声と共に舞台に詰めかける観客

“500万ジエニーを支払つた方には、かくれんぼの対象者の顔写

真をお渡しします！では——競売スタート！』

「20億ジエニー…」

眩ぐゴン

「3人も捕まえたらグリードアイランド買えるかな」

呑気に言うキルア

「…何かあつたってどういうことだよ」

真剣な表情のレオリオに疑問を挟むキルア

「この場所を見ろよ。地下ホールに試合の舞台。本来ならここはボクシングやレスリングの試合を賭けにしたお金稼ぎをしてたどこだつたはずだぜ」

「…つてことはここマフィアたちに何かあつたってことか」

頷くレオリオ

「ああ、だがヨークシンシティを仕切るコミュニティマフィアにケンカを売るやつなんて国でもいやしねえ」

「いや――、いる」

真顔でそう言うキルア

「え？誰？」

「ゴン、オレたちが聞いたことある名前さ。もちろんレオリオも。：：
そう、”幻影旅団”」

一瞬沈黙の流れる3人

「…あの幻影旅団か」

「そういうこと。…どうする？」

そう問い合わせるキルアに返事をしたのはゴン

「オレは…やるよ」

「おまつ！相手はあのA級首だぞ！」

「それでもやらなきや始まらないから」

ゴンの真っ直ぐな目

「無理だよレオリオ。こうなつたらこいつは聞かないよ」

そのキルアの言葉に従うように、3人は500万ジエニーを支払つて地下ホールを後にした

【88】掲示板

（ヨークシン郊外 廃屋）

（——こは……どこだ…？）

ぼーっと辺りを見回すクラピカ

天井が見えるところから、自身が寝かされていることがわかる
(明るさからいつて朝、か。天井の壊れ具合から廃屋だと推察できる。
気候は変化がない、ということはヨークシンシティ周辺か)
そして首を回して部屋を見渡したとき

「やあ◆」

この男と目が合う

「——つ！ヒソカ！」

起き上がるうとするが体が動かない

「まだ無理みたいだね。オーラの使いすぎ◆」

その様子に、何かをされることはないと感じたクラピカ

「私は、どうなった？」

その問いにヒソカは簡単に説明する

「キミと彼は相討ち。と言つてもほほキミの勝ちみたいなものだつた
けどね◆無駄にオーラを消費してオーラ切れにならなければ余裕で
彼を屠れただろうね」

「奴は、どこだつ！」

「それは教えられない◆キミはボクに助けられた。だから彼をどうす
るかはボクの自由」

「何が目的だつ！」

指先の上でトランプをくるくると回しながら答えるヒソカ

「うーん、前にも言つた通り目的は『団長』◆そこに彼が使えそうだ
からカードとして持つておこうと思つただけ」
数秒ヒソカと視線を合わす

「——くそつ！」

クラピカは拳で地面を叩く
わかっているのだ

自分がヒソカに助けられて借りができてしまつたこと

だからこそ、ウボオーギンをどうするかはクラピカに決められないこと

冷静になれず、オーラを無駄に消費しすぎた自身が招いた結論だと
いうことも

「さて、じゃあボクは行くよ◆1日くらいは大丈夫だと思うけど、彼の
ほうも見とかなきや逃げられるしね。キミはダメージも少ないから
もう少し横になつてれば動けるだろう」

そう言うと、ヒソカはクラピカの横に水の入つたペットボトルを置
いて、廃屋から姿を消した

♪ヨークシンシティ 中心街♪

「じゃあどうやって探す?」

裏路地から中心街へと出てきたゴンたち

「やつぱりなんも考えてなかつたか…」

ゴンの発言に首を落とすレオリオ

「それより、本当にやるのかよ」

改めてそう言つたキルアは、話をしはじめる

「実はさ、オレの親父が仕事で幻影旅団の1人を殺つてんだ。そして
珍しくぼやいてたんだ』割りに合わない仕事だつた』つて』

「それつてどういう意味?」

「それは標的に対する最大の贅辞なんだけどさ、その時オレたちに
言つたんだ。『旅団には手を出すな』ってね。まあ3年くらい前の
話だけど」

静まる3人

「――でも、できるだけのことはやるよ!それに今回は捕まえるだ
けなんだしさ!」

「しゃーねえな。なら探すか」

「えつ？レオリオ、なにか良い方法あるの!?」

「まあな。他のやつらもやつてるはずだぜ」

それはネット掲示板

3人は掲示板に幻影旅団の写真を張貼り付け、有力な情報に支払いをする方法を取った

一瞬で溢れかえる情報に、『場所・時間・証拠写真』を条件にし、正確な情報の選別を始めた

【89】殺し屋集合

（ヨークシンシティ 繁華街）

「なかなか網にかかるねえな」

「ほんとにこんなとこに出て来るのかね、鎖野郎は」

長髪の男と、ボサボサ髪の女

2人は連れ立つて歩く

既に陽は真上

昼間を回っていた

「ウボオーを狙つた理由がわからねえからな。狙いがオレたち幻影旅団なら、あのとき荒野にいたオレたちを狙いに来る可能性はあるが」「どうだろうね。あたしはすぐに出でては来ないと思うけどね」

「またお得意の勘か？」

「勘もあるけど、鎖野郎があのときウボオーを掲つたんは、あたしたち全員と戦うのを避けるためだつたと思うんだよね」

そう言いながら繁華街を見回す2人

「つてことはなんだ、オレたちが2人でいたら鎖野郎は来ないってか？」

「と、あたしは思つてる。けどツーマンセルは団長の指示だから個人行動はさせないよ」

そう言つたところで、女、マチが足を止める

「ノブナガ、あそこならテラスがあるからちょうど良いんじゃない？」

そして2人はテラス付きの喫茶店へと入つていった

（ヨークシン 秘密の会合所）

（間に合つたか）

ヨークシンのあるビルの一室

十老頭が管轄する秘密の会合所

そこには殺し屋が集められていた

今回のオーラクション会場襲撃犯の暗殺の為である

そこにクラピカはノストラードファミリーから派遣される形で参加していた

先に部屋に居たのは7人

凄みも何も感じない、冴えない者が3人

別段特徴もなく、コミュニティに恩を売るためにどこかのファミリーがその中で腕の立つものを派遣してきたような感じだ

その横にいるのは、確実に殺つてそうな者が2人

ベレー帽のようなものをかぶった男
センターの左側だけを剃つた男

そして壁際で静かに立つている者が2人

銀色の長髪で整った顔立ちの男
顔に機械を取り付けた三つ編みの男

(この2人は確実にできる…)

クラピカが参加している者たちを見渡していると、背中から声がかかる

「すまんが退いてくれんかの？」

後ろに居たのは、老人と壮年の男

クラピカはスッと避ける

「すまんの」

そう言つて老人は壮年の男と共にソファへ向かう
と、老人だけが三つ編みの男の前で足を止める

「お主、…もしや桃白白か？」

桃白白（タオパイパイ）と呼ばれた男は苦々しげに老人と視線を合わせる

「ゼノ、やはり貴様が来たか」

ゼノと呼ばれた老人

「ふむ、お前さんがおるならここに集められた者たちのレベルが知れるということじゃな」

「ゼノじじい…。いつまでも昔のままの私とは思わない方が良いと思うがね」

キュイン

桃白白の機械の目が注意深くゼノを見る

「なんじやお主、機械なんぞ使いおつてからに。…まあ40年以上も会つてなければ人は変わるからの」

それだけ言うと、ゼノはソファーに座る

全員が揃つたことを確認したのか、銀色の長髪男が口を開く
「お集まり頂きありがとうございます。今回は十老頭よりの依頼で、幻影旅団の抹殺指令が出ております。私は十老頭で陰獣統括をしているカストロと申します」

そうカストロが説明すると、冴えない3人組から質問が出る

「やり方は?」

「特にございません。依頼事項は『幻影旅団の抹殺』それだけです」

それ以上の説明がないと悟つたのか、冴えない3人が残りの殺し屋たちに話しかけ始める

「とりあえず呼び名でも決めよう。何かあつたときに連絡も取り合える。…色でいいか。オレはブラックと呼んでくれ」

「じゃあオレはレッド」

「なら私はイエローで」

そう3人組が言つたあと、順番的に壮年の男とゼノの番になる

「シルバ」

「ゼノ」

それだけ短く言うと興味なさげにする

「シルバーに…ゼノ? 何色だ? というよりさつき呼ばれてた名前じやないのか?」

冴えない男の1人がそう口を開いたとき

もう1人の冴えない男が反応する

「待て、シルバにゼノ…まさかゾルディック家!? 誰も本当の姿を見た

「…」

「別にワシらは普段、変装も潜伏もしとらんのだがのお」

「もしかしてゾルディックというのも暗号名じゃなくて本名なのか！」

「そうじや。名刺やつどこか？住所と電話番号も載つとる」

不気味に笑うゼノ

「な、なら…」

そう言つて冴えない男は後ろを振り向く

「ま、ま、まさかあんたの桃白白っていう名前も本当に…」

「私も隠してはいませんがね。いまなら1億ゼニーのところを、半額の50000万ゼニーで引き受けてあげても良いですよ」

そう言つて笑う桃白白を、更に鼻で笑うゼノ

「ふん、お主は割引し過ぎじや。もし殺したいやつがいたら連絡をくれ。3割引で請け負うぞ？しかもやつとは違つて確実にな」

それを聞いて冴えない男3人組は静まり返る

クラピカはゼノとシルバを見る

（彼らがキルアの家族…成る程、明らかに他の者より威圧感が数段上だ）

そして冴えない3人組を見る

（この者たちも、決して暗殺者としてレベルが低いわけではないだろうが、力の差を感じて萎縮してしまつている…）

次に視線を向けたのは桃白白

（桃白白…暗殺者としてあまりにも有名。表世界で有名なことから、実力は裏世界の者に劣るかも知れないと言わっていたが…そんなことはないな。明らかにゾルディック家の2人と同等…。）

そして隣に立つカストロ

（彼は見たことがある。天空闘技場のフロアマスターになつた男。すぐには辞めたことで有名になつたが…まさか十老頭のところに居るとは…。かなりできそうな雰囲気だ）

最後に残りの2人に目をやる

（そんな強者たちになんとか対抗できそなのはこの2人、か）

「別にいいじゃん呼び名なんて。だつて呼ぶことないもん」

ベレー帽をかぶった男がそう口を開き、続ける

「一人一人が好きにやつて良いんじゃないの？」

「同感だな互いに流儀も思想も違うんだ。無理に足並みを揃えることはあるまい。オレも勝手にやらせてもらう」

髪を半分だけ剃った男も、ベレー帽の男に同意する

それに合わせてクラピカも口を開く

「私もその意見に賛同だ。稚拙な連携はかえつてミスを生む。人手が必要ならコミュニティの者を使えば良いだろう」

「そういうことじゃな」

クラピカの言葉にゼノも頷く

そして頃合いを見ていたカストロが口を開く

「それに桃白白先生は十老頭の護衛任務が入っている。それぞれやるべきこともあるだろう。では、これで解散です」

その言葉を最後に、殺し屋たちは部屋を出ていった

【90】尾行開始！

「ヨークシン 喫茶店」

「あそこ！」

ゴンたちは掲示板の情報を頼りに、喫茶店へと入っていた
外のテラスには標的の幻影旅団2人

「おい！ゴン！気配を出すな！」

「あ…うん」

とりあえず席に座る

「こつから先は絶対に姿を見られちゃいけないから――」

スツ

そう言いながらキルアが気配を消す

「絶を使う」

「了解！」

ゴンもスツと気配を消す

「レオリオは『絶』できる？」

「もちろんできるぜ。だがオレはグリードアイランドの情報を集めと
くぜ。要はゲームができれば良いんだろう？」

「…？ どうだけど買わないとゲームできないよね？」

首をかしげるゴン

「ああ、まあその辺りは考えなくていい。とりあえずそっちの方は任せ
せといってくれよ」

ニコッと笑つて親指を立てるレオリオ

「ゴン、尾行について守つてもらうことがある。奴等に姿を見られた
ら尾行は即中止！速やかにその場を離れること！そしてオレが中止
と判断したときも同じ！」

「オッケー！わかつた！」

「じゃあオレからも。ゴン、キルア、2人共本当に無茶はするなよ」

それだけを言うと、レオリオは喫茶店を出ていく

そしてゴンとキルアの幻影旅団追跡が始まる

（ヨークシン テラス広場）

「見られてるな」

「だね」

ノブナガとマチは油断なく周囲を警戒していた

「鎖野郎の仲間か？」

「あたしが知るわけないだろ。もし捕まえてみて鎖野郎の仲間だったらどうすんだい？」

「さあな。もしそうなら団長の命令通りやりたいようにやるだけだ」

「…団長はおそらくそいつを仲間にしたがつてるとと思うけど」

「マチ」

少しピリッ 空気が変わる

「てめえの意見を押し付けてんじゃねえ」

「はあ？ 押し付けてんのはノブナガ、あんただろ。私は団長の考えを推察しただけ」

「それが押し付けみてえなもんなんだよ」

ピリッ！

テラスの温度が下がったように感じるほど、緊張感が漂う

屋根の上から見ていたゴンとキルアも全身に冷や汗が流れる

ノブナガがコインを取り出す

ピンッ

弾いて掴む

「裏」

マチがそう答えるとノブナガが手を退ける

「表だ。いいな、鎖野郎は殺す」

「ふん、わかつたよ」

憮然とするマチ

ノブナガは気にせずにマチに促す

「んじや、まあ――動くかね」

「だね。この見てるやつらを誘き出さないとね」

立ち上がるノブナガとマチ

それを見ていたゴンたちは、気づかれていることも知らずに追跡を

開始する

キルアの読みは間違っていない

場所はバレていない

だが、どこからか見ていることは気づかれていた

「ゴン、続行だ」

「わかった！」

ノブナガとマチが歩いていくのを屋根伝いに追いかける
次第に広場から裏手へ移動していくノブナガたち
(ましい、気づかれてるか…いや、そんなことはないはず！アジトに向
かっている可能性も！)

そんなキルアの予想に反して、ノブナガたちは逆にキルアたちを探つていて

「なかなか尻尾掴ませねえな」

「だね、広場でいろんな視線を感じたけど、全部素人だつた。だけど今
回はプロだね」

次第に人気のない完全な裏路地に着く

「さあて、出てくるか」

ノブナガはそう言いながら腰を下ろす

(くそつ、待ち合わせか…それとも…)

キルアは動きのない幻影旅団2人を見て焦り始めていた
念も覚えて、発も覚えて、必殺の電撃も使える
だが、それでもいまの自分に勝てる相手ではない
そうキルアは判断していた

ましてやゴンを逃がすこともしなければならない
そう考えていたとき

幻影旅団の1人、男の方に電話がかかって
電話を取ったノブナガ

「よう、苦労してるみたいだな。追跡者の場所教えてやろうか？」

それはフィンクスからの電話だつた

そんなことを知らないキルア

用心深く幻影旅団の男を見ていたその瞬間

スツ

男の目がキルアを見た

(マズイ!)

一瞬で廃ビルから抜け出そうとするキルア
同じくゴンも、それを察して逃げようとする
だが、キルアの前にはフィンクス
ゴンの前にはパクノダが立ち塞がる

ガガガガガガガガガッ!

縦横無尽に飛び回り、部屋の出口へ向かうキルア
フィンクスはキルアの動きを見切つて足を掴む

その瞬間

バリバリッ!

キルアの雷掌（イズツシ）が炸裂する

「ツツ！」

フィンクスの手が緩んだ好きに蹴りを入れて抜け出すキルア
そのまま出口へ駆け込んだ途端

キルアは動きを止める

首筋にうつすらと血が浮かぶ

キルアの首には刀が添えられていた

「いいか、動くんじゃねえぞ」

ノブナガの刀が喉元に当たり、動きを抑えられる

「よお、フィンクス。まさかお前たちまで来てるとは。二重尾行とは
やられたぜ」

「ふん、団長の指示だよ」

「かー、どおりで絶の使い手が多いと思つた」

(二重尾行……やられた！)

「でもよお、その二重尾行してた奴が逃げられてちやあ意味ねえよな」

「そいつあ悪かつたな、だが気を付けろよ。そのガキ電撃使いだぜ」
(バラされた・警戒してる中で使って効果のある相手じゃない…逃げるのは、無理か)

そんな話をしていると、ゴンが連れてこられる

「あ！キルア！無事だつたんだね！」

「これで無事に見えるならな」

ため息をつくキルア

「追跡者はこのガキ2人だつたみたいだね」

マチがノブナガたちの前にゴンを差し出しながら言う
キルアもフインクスに締め上げられる

「パクノダ、お前え怪我してるじゃねえか」

「ええ、やられたわ。肋骨数本はいってるかも。まあまあな子たちね」

「で、どうする？」

そのフィンクスの問い合わせは決まっていた
ゴンとキルアは車で幻影旅団のアジトへと連れ去られて行つた

【9-1】旅団アジト

（ヨークシン郊外 幻影旅団アジト）

「ほら、入れ」

ノブナガに押されて建物へと入るゴンとキルア
「こんなどこ見せていいのかよ」

アジトを見せていいのか？と問うキルア

「減るもんじやねえしな」

かつつかつか、と気さくに笑うノブナガ

連れられて上の階へと行く

そしてフロアに着く

そこには幻影旅団たちが勢揃い

「なに？ その子供達」

シャルナードが興味深そうに見てくる

「私たちをつけてきた子供達よ。懸賞金目当てで追つてたみたいだけど、鎖野郎の記憶はなかつたわ。ただノブナガが連れて帰るって言うから」

（記憶…なぜそんな言い方を…まさか記憶を読む念能力者!?）

パクノダの言い方に疑問を抱いたキルアは、そう結論付ける

キルアはさつと全体を見渡して、ヒソカを見つけていた

（ヒソカ！ 奴ならゴンのことを気に入ってるから逃がしてくれるかも
…知らんぷり）

ヒソカもゴンたちを見て一瞬驚くが、知らない振りをする
「で、団長は？」

マチが団長の所在を聞くが、誰からも返答がない
と、そのとき

「あ！」

フロアを見渡していたゴンが声を上げる

（バカ！）

（アホ…）

キルアとヒソカが同時に心の内で呟く

「なんだ？ 知り合いでもいたか？」

そう問われて、自分のミスに気づくゴン

「あー、えーっと、あの！人！人？」

ゴンが指したのはヒソカの足元で縮こまっている豚のような人物
「天空闘技場で250階のフロアマスターにくつづいてた！」

「そーいや居た気がするな…」

ゴンが指したのはウーロン

天空闘技場でベジータとヤムチャが戦ったときに、後ろにいた2人
(匹)の人物の1人

「なんだ？あの豚のこと知つてんのか？ヒソカのペットだと思つてた
が」

「知つてるというより見たことあるというか？」

「あんまり良いイメージないけどな」

微妙な回答をする2人

「もしあの豚の仲間だつたらあんたら殺してたけどね」

ギリツ、と歯噛みしながら睨むマチ

天空闘技場でウーロンに下着を盗まれたマチは未だに根に持つて
いた

「団長が殺すなって言うから我慢してるけど…そうじやなかつたら一
瞬でロースハムにしてるところだね。そんなことにあたしの糸を使い
たくないけど」

「で、そいつらどうするあるか？」

「結構使えそんなんで仲間にしたくてよ。とりあえず団長に見てもら
うつもりだ」

フェイタンに問われてそう返すノブナガ

だが、それを聞いて大声を上げるゴン

「誰がお前らなんかの仲間になるか！人を殺すような奴等に！」

「お前、生意気ね」

ヒュツ、とフェイタンの剣が風切り音を立てる

キュイン

その剣とノブナガの刀が交差して止まる

「なぜ止めるあるか？」

「こいつはオレが連れてきた。手を出すんじゃねえよ」

フェイタンが動いたときに、キルアも動こうとしたが間に合わなかつた

更にキルアの喉元にはヒソカのカードが添えられていた
(速すぎる…。この黒服の男も、侍の男も、そしてヒソカも…。絶対的な速さが必要。雷掌だけじゃない、速さを極める能力が)

自分ではゴンを助けられないキルアは、そう心に誓つていた

ピピピッ

そんなやり取りの中、ヒソカはスカウターでゴンとキルアを見てい

た

(ゴンが『376』、キルアが『422』…素晴らしい成長速度◆…ああ、早く食べたい……)

舌舐めずりをするヒソカ

また、一瞬だけだが剣と刀をぶつけた時のフェイタンとノブナガの戦闘力もスカウターは拾つていた

(フェイタンが『136 ⇒ 1360』、ノブナガが『121 ⇒ 1185』
か。やつぱり旅団は楽しめそうだ…)

ヒソカが妄想しながら楽しんでいると、シャルナーグが全員に話始める

「まあまあ。とりあえずその子供達をここに置いておくわけにはいかないからさ。別の建物に移そう。監督は連れてきたノブナガがする、つてことで」

「わーったよ。ほら、行くぞ2人共」

ゴンとキルアを促すノブナガ

そこにヒソカが声をかける

「ついでにこの豚君も頼むよ◆」

ひよい、と掴んでノブナガに投げる

「こいつはお前えのペツトだろうが」

「その子供たちと知り合いみたいだからね◆それにちょっと用事が
あつていまからまた抜けるし」

「ヒソカ、あんたそんな勝手してたら団長から殺されるよ」

集合命令がかかっているにも関わらず、いまから抜けるというヒソ

カ

マチのそんな警告も無視して

「それは楽しみ…◆」

と、それだけを言つて消えていった

【92】ノブナガとウーロン

／ヨークシン郊外 幻影旅団アジト別棟／

「さあて、とりあえず団長来るまではお前さんたちはここで待つてな」
ゴン、キルア、ウーロンは先程のアジトとは別の棟に連れてこられた

「お、オレたちをどうしようってんだよ」

ウーロンがキルアの後ろからノブナガへ問いかける
「お前さんが怯えることはねえだろよ…。ヒソカのペツトだし、団長
からは殺すなって命令されてるしな」

「い、いつ帰してくれるんだよ！」

「そりやあ…ヒソカに聞くしかねえなあ」

困ったようにポリポリと頭をかくノブナガ

「あ、あのピエロ、なんか不気味なんだよ」

「だつはつはつ！だよな、あの顔は不気味だよな！」

嬉しそうに笑うノブナガ

「まあ悪いようにはしねえさ。お前さんも、そっちのガキ2人もな。
団長の眼鏡にかなわなければ無事に逃がしてやるから安心して待つ
てな」

そう言うと一つしかない入口に腰を下ろすノブナガ

「どうするキルア？」

「…どうしようもねえな。この狭い部屋じや会話は筒抜け、そしてあ
いつの刀はオレでも見切れない」

2人の会話が聞こえていることの証のように、ノブナガが口を開く
「そういうことだ。どうしたつてお前えさんたちは逃げられねえよ。
オレはお前えさんたちを氣に入つてんだ。刀を抜かせるような真似
だけはさせねえでくれよ」

とにかく座るゴンとキルア

「ねえ豚さん」

隣に座つているウーロンに声をかけるゴン

「豚さんじやねえよ。ウーロンだよガキンちよ」

「え？ そつちも子供じゃないの？」

「こう見えても結構な歳いつてんの！ つたく、最近のガキはこれだから」

ら

愚痴るウーロン

「なにこの豚、さっきまでの態度と違うじゃん」

驚くキルア

「けつ、どうせどうにもならないなら座つとくしかないだろ」

「態度わるつ！」

アハハ、と笑うキルアとゴン

「ウーロンさんはなんで捕まつたの？」

「ヒソカに連れてこられたんだよ。天空闘技場で捕まつてからず一つとだ」

「何したんだよ」

キルアにそう問われて言いにくそうにぶつぶつ呟くウーロン

「…旅団の…：女のパンティー盗んだ」

一瞬の間があつて笑いだすゴンとキルア

ノブナガも笑いを堪えている

「そりやーお前さんが悪いな。で、盗んだのはパクノダか？ マチか？ シズクか？」

「なんでおっさんが話に入つてくんだよ」

キルアがじと目でノブナガを見る

「いいじやねえか。仲間はずれにするなよ。で？ 誰のだ？」

「…マチ、つていう女のやつ」

だーーっはっは！ と膝を叩いて笑うノブナガ

「よりによつてマチのとはな、くつくつく」

「マチ、つてあのツンツンした髪の？ ちよつとキルアに似てる？」

「似てねえよ！」

キルアの突っ込みも無視して、ノブナガがウーロンに尋ねる

「あいつ、どんな趣味してんだ？ くくっ」

「もしかしてオツサンも話せる口か？ あの女、可愛い熊のキャラクターもの穿いてたんだぜ！」

だーーっはっは!!

本気で膝をバンバン叩いて笑うノブナガ

「笑い死にさせるきかお前え。くつくつく。あー腹痛え」

それを嫌な目で見るキルア

「エロ豚とエロ侍じゃん」

♪ヨークシン中心街 カクテルバー♪

「あのー、まだまだっすかね…?」

「3万ジエニーの借金だよ? 1日1万としても3日は働いてもらわんとね」

「そこをなんとか…」

「そんなことを言う暇があつたら手を動かしてくれ。次はトイレ掃除だ」

モップを渡される男

(こんなことしてる暇じやないんだけどなあ…)

そう思いながらも、男はトイレへと入つていった

♪ヨークシン郊外 幻影旅団アジト別棟♪

「さて、冗談抜きにして帰ろうぜ、ゴン」

「でもどうするの?」

スッと雰囲気を変えたキルア

「ウーロン、つて言つたつけ? あなたの能力は?」

「さん、を付けろよな。変身、ができたんだけど…」

言い淀むウーロン

「ウーロンさん?」

「…なんか使えねえんだ」

肩を落とすウーロン

「じゃあ役に立ちそうにはないな」

ズバリ言うキルア

「おい、お前ら。妙なことすんなよ。絶対に無理なことはすんな
そんな3人の簡抜けの会話にノブナガが口を出す

「無理かどうかやつてみなきやわからねだろ」

殺氣を放つキルア

「ちょ、ちょっと待ってよキルア」

「そいつの言うとおりだ。入口、お前らにとつては出口か。それはこ
こ一つしかねえ」

コンコン、と拳で背中の扉を示すノブナガ

「道が一つしかない……そうだよキルア！ トリックタワーだ！」

「なんだよいきなり」

「覚えてない!? 悟空さんやベジータさんのあの行動！」

「——ツ！ なるほど！」

バツ、と振り向くゴンとキルア

「ヤル気満々、つて顔か……。残念だな、本当に気に入つてたんだがな
カチヤ、と刀に手をかけるノブナガ

「いくよ！ キルア！」

シャツ！

ゴンとキルアが一直線にノブナガへ向かう

「真っ向からとは本気のバカか！」

ヒュツ、と刀を抜きかけた瞬間

ババツ

ゴンとキルアが左右に飛んで壁を蹴破る

（何つ！ こいつら壁を！）

カンカン

階段を下りる音を聞くノブナガ

（ツンツン頭の方はすぐ階段側、黒髪のほうは袋小路……）

なら、とノブナガは廊下に出てゴンを追う

部屋を開ける度に壁を蹴破っていくゴン

「くそつ！」

最後の部屋まできたがゴンはいない

(しまつた！壁だけ壊して部屋に潜んでやり過ごされたか！)

そう思つた瞬間、声が聞こえてくる

「キルア！いまならやれるよ！」

(黒髪のやつの声か。バカが！暗闇に乘じてやるつもりだろうが無駄だ)

そしてノブナガは精神を集中させる

(『円』！これで暗闇でも手に取るようにわかる。オレは太刀の間合い、半径4mまでで十分、つーかこれが限界)

円を維持したままジリジリと歩くノブナガ

だが、ゴンとキルアは戦う宣言をしたまま既に逃げ去つていた

「誰が戦うかつつーの」

捨て台詞を吐きながら走るキルア

「そう言えばウーロンさんは逃げられたかな？」

「どつちにしても殺されないから大丈夫じやね？」

そう言いながら、ゴンたちはヨーケシンの中心街へと向けて戻つて行つた

【93】ウボオーとヒソカ

「ヨークシン郊外 幻影旅団アジト」

「で、その子供達にも、豚にも逃げられたということか？」

団長、クロロに問われるノブナガ

「面白ねえ」

「まあいいだろう、大事の前の小事だ。それよりヒソカはどうした？」

「一時間ほど前まではいたんだけど、出ていつてからはそれつきり」

そうマチが答えると、クロロは顎に手を当てて少し考え込む

「…まあいいだろう。今日はいまからやるべき事がある。皆もわかっているだろう？」

全員が頷く

「——よし、行くぞ」

バサツとマントを翻し、旅団全員を引き連れてクロロたちはアジトを後にする

目指すはヨークシン中心街

「ヨークシン郊外 廃屋2」

ヒソカはアジトを出て、少し離れた廃屋へとやつて来ていた
クラピカが寝かされていた廃屋とは別の廃屋

そこにはヒソカが連れてきたウボオーギンが寝かされていた

「——こ、は？」

「やあ◆目覚めたかい？」

うつすらと目を開けるウボオー

「…寝起きにてめえの顔は効くな…」

起き上がるうとするが、まだ体が動かない

「ちつ、ここまでガタガタにやられるとはな。ヒソカ、てめえがここに連れてきたのか？」

「もちろん◆」

首だけ動かしてヒソカの方を向くウボオー

「つてことはてめえに助けられたつてことか。やつてられねえな。」

「鎌野郎はどうなつた？」

「逃げられたよ。キミを助けるだけで精一杯◆」

「はつ、相変わらず嘘くせえな」

「んー、逆に相変わらず信用がないなあ」

当たり前だ、と言いたげにあきれた顔でヒソカを見る
で、助けたからには理由があんだけ？」

「やっぱり話が早い◆」

いいから早く言え、と急かす

「団長と1対1で戦つてみたいんだよね、男同士として」

「あー、なるほどな」

ヒソカの言い方は最もだ

ウボオーから見ていても、クロロの周りにはいつも何人かいる
しかもマチやシャルなんかは、男の決闘なんて考えずに邪魔をする
だろう

確かにあいつらは決闘の邪魔をするだろうな

「だろ？ キミでもそう思うくらいだから相当なベツタリでね」

「決闘は邪魔すべきもんじゃねえからな。つて一ことはオレにマチや
シャルを止めて欲しいってことか」

「そゆこと◆」

につこりと笑うヒソカ

「まあ貸しができちまつたし、そんくれえなら仕方ねえか」

「じやあ気がついたみたいだし、ボクは用事があるからいくよ」

「ああ、オレはあと数時間くらいしたら動けるようになる。団長にす
まねえ、と伝えておいてくれ」

それだけ話すとヒソカは廃屋を出ていく

(今日は団員の戦闘力を測る最高のチャンスだからね◆)

【94】その男は？

♪ヨークシン中心 ショッピングモール♪
ノストラードファミリーのネオンに声をかける男
頬に十字傷があるのが特徴的だ

「ナンパ？」

「かもね」

そんな会話から自然と話し始める2人

「——つて感じで退屈だから逃げ出してきちゃった」

「あはは、それは凄いね」

「実はあたし占いが得意でー」

「へー！すごいね！オレも占つてよ」

「じゃあ紙に自分のフルネーム、生年月日、血液型を書いて」

ペンと紙を渡すネオン

受け取った男はサラサラと書く

「じゃあ占うよ」

そう言つてペンを取つたネオン

男は注意深くその動き全てを見ていた

♪ヨークシン 秘密の会合所♪

トゥルルルルル

「もしもし、クラピカだが」

『あ！クラピカ！オレだよ！ゴン！』

「ああ、声でわかるさ」

『いまヨークシンにいるんだよね!?どこかで会えない!?』

『いまは難しいな。噂になつてゐるかもしれないが、いまは旅団を追つてる』

秘密の会合所の窓からヨークシンを一望するクラピカ

『その旅団についてなんだ。さつきまで捕まつててさ――』

「どういうことだ!? 無事なのか!」

『あ、うん。それは大丈夫だつたんだけど。オレたちもクラピカと同じ旅団を止めたいんだ』

「…わかつた。いまからは無理だが、明日話そう。場所は追つて連――」

ドオオオオオン

窓の外で爆煙が上がる

「すまない、また連絡する!」

プツ、と電話を切るとクラピカはその爆煙の上がつた場所へと向かつた

カストロはその様子を見て、爆煙の近くにある重要施設、セメタリービルへと移動する

カストロの読みと同じく考えか、ベレー帽の男と、髪を半分剃つた男も同じビルへと足を向けた

♪ヨークシン セメタリービル♪

「ここ来てみたかったんだー」

はしゃいで歩くネオンと、付き添う男

「オレもやりたいことがあつてね」

「えー、なになに?」

(大暴れ) トンツ

ドサツ

急にネオンが倒れる

周囲がざわつく

そのシーンを警備室見ていた男が2人

カストロとベレー帽の男

髪を半分剃つた男は既に動いていた

「その画面、巻き戻せるか？」

「ん、ああ」

ベレー帽の男に言われて画面を巻き戻す警備員

そこには微かに男の腕がぶれたように映っている

（恐ろしく速い手刀…オレでなきや見逃しちゃうね）

ニヤリと笑う、手刀を見逃さなかつたベレー帽の男

だが、カストロは違う反応を見せていた

「師匠…」

愕然とするカストロの横を抜け、手刀を見逃さなかつたベレー帽の

男は、頬に十字傷のある男を追つて行つた

【95】カストロ激突

（ヨークシン セメタリービル最上階）
各地で爆煙が起こり、人々は逃げ惑う

階段を駆け下りる人の流れに逆らつて歩く男が1人
最上階の部屋へと消えていく

そして最上階フロアについたもう1人の男
廊下に落ちた血痕を見ながら追いかける
まるで血の道標

途中の壁にわざとらしく突き立てられた1人の男
髪を半分だけ剃った男の死体

（匂う、匂うぞ…）

くくく、と笑みを溢しながら男の後を追う、手刀を見逃さなかつた

男

力チャ――

そして一番奥の部屋の扉を開けた

（ヨークシン 中心街）

ドオオオオオ

パパパパパパ

爆炎と銃声があちこちで響き渡る
幻影旅団たちが各地で暴れまわる
それを追う影が1つ

（マチが『983』）

（シャルが『997』）

（フィンクスは『1457』、流石にやるね◆）

（ノブナガとフェイタンはさつき測つたし…）

（フランクリンは…『1344』か）

（シズクとパクノダは戦闘要員じゃないけど…『722』に『734』

か。結構やるね◆)

(『1997』!?コルトピ、次のターゲットはキミでもいいかな◆)
(ボノレノフは『1110』、やっぱり旅団はいいねえ…◆)
ヒソカにとつての獲物、幻影旅団の戦闘力を測っていた

「ヨークシン セメタリービル最上階」

カストロは最上階の部屋へと入る

先に手刀を見逃さなかつた男が入つて行つたはずの部屋
だがそこに居たのは1人

頬に十字傷を付けたその男

「師匠!!」

有らん限りの声でそう叫ぶ

「…なるほど。運命とは面白い」

「何を訳のわからないことをツ!!なぜこのような!!」

「余程信頼しているのか。いや、信頼していた、と言つた方が正しい
か。私からの説明を求めるあたりそれが真実」
「ふざけるのも大概にしてください！」

激昂寸前のカストロ

「今日は鎮魂歌を奏でる日でね。キミも聴いていくといい」
ビルの下では街中から爆発音が上がる

「…もう、前の師匠ではないのですね。なら！私が止める！」
ゴオッ！

オーラを爆発させるカストロ

「師匠、貴方から教えて頂いたこの技で！」

構えるカストロ

天空闘技場のときには完成していなかつた技、虎咬風風拳

「行きます！」 真・虎咬風風拳』！」

ガガガガガガガガガツ!!!!!!

猛烈な勢いで男へ攻撃するカストロ

男はそれを片手と両足を使つて捌く

「本を読んで余裕のつもりですか!? でもつ！」

顔の正面に拳を繰り出し、ガードを上げさせたカストロ
空いた横腹に深々と突き刺さる蹴り

きりもみしながら男は壁に打ち付けられる

(ぐつー・この男、本当に強い！本を閉じて戦うか…、いや、下にあの2人組が来ているのを感じる。この戦いの後にあの2人を相手にするのは無理だ)

かつつかつ、と歩み寄るカストロ

「弱くなりましたね。私がときの一撃入れられるとは…」

失望の色と共に見下ろすカストロ

(この男、団員と同じレベルの強さはあるな…。そんな男が一撃も入られられない奴がいる…ヤムチャ、名前は覚えておくか)
ズリ、と壁を使って立ち上がる男

「私は刺し違えてでも師の行動を正す！」

指先にオーラを溜めたカストロ

そして突きを繰り出した瞬間

バツ

一瞬にして男が消える

「消えた!？」

(いやー違う！部屋が違う！どういうことだ!?)

一瞬前まで戦っていた部屋とは違う場所に居た
扉を開けて廊下に出るカストロ

(ここは…同じくセメタリービルの最上階!)

バツと振り向き、先程までいたはずの部屋へ駆け込む

そこには、縮こまつて頭を抱えた中年の男が1人

他には誰もいない

(どういうことだ!? 師はどこに!?)

「おい！ 師はどこだ!？」

中年の男を掴み上げる

「ひつーひいい！ ちょ、超能力者っ！」

「超能力者だと!?」

カストロは男を下ろす

そして大きく一度深呼吸をする

——その中年の男が言うにはこうだ

爆発が起こり、怖くなつて部屋に隠れてうずくまつっていた
すると一瞬にして違う部屋に飛ばされていた

その男の元の部屋は、カストロが飛ばされた部屋だつた
(……の男と場所を入れ替えられたのか)

いつの間にそんな新技を、という思い

そしてそこまで姑息な技を使って逃げる師

姑息なところは昔からだが、こんなやり方はしなかつた

「本当に変わつてしまわれたのですね……」

師を蹴つた右足より、心の方が痛む気がして
カストロは胸をおさえた

【96】桃白白とイルミ

～ヨークシン セメタリービル地下～

「さて、どう戦うかな」

男の目の前には、老人と壮年の男

「お前さん、クロロじやろ」

老人がそう声をかける

「なんでわかるかな」

「後ろ手に持つとる本、その能力は忘れんよ」

やりにくいなあ、と後頭部をかきながら本をしまう

ボンツ

頬に十字傷のあつた男から、幻影旅団の団長クロロに戻る

「なんでそんな格好しどつたんじや？」

「元フロアマスターらしくてね。監視のきついこの中心街に入るのに

便利だつたんで」

「じゃあ、早速はじめるかの」

ゴオツ!!!

老人、ゼノ

壮年の男、シルバ

ゾルディック家の2人がオーラを爆発させる

「やつぱり凄いな…」

ゴオツ!!!

クロロもオーラを爆発させる

「シルバ、ちと厄介かもしけんの。ワシもろともで良い。やれ

「わかった」

そして息の吐く暇もない戦いが始まる

（流石クロロ◆『1313』、そしてあのじいさんもやるね…『128

7』）

そしてヒソカはシルバにも目をやる
(ゾルディックの現当主、か…)

スカウターに映る『1988』の数字に笑みが溢れる

(ウボオーよりも少ないけど…動きが段違い◆戦つたら確實にこの男の方が勝つね)

そんな2人の攻撃を捌くクロロ

(ああ、やつぱりいいよ…クロロ◆)

悦に入つたヒソカはしばしその戦いを見守り、そして別のあるホテルへと向かつた

♪ヨークシンシティ中心　あるホテルのフロアへ
「来たようですな」

十老頭のいる部屋で待機していた桃白白が立ち上がる

「そ、それは本当ですか先生！」

「ふむ、この気配からいつて楽しめそうな相手ですな。1人は完全に氣配を消してますが…まあ何かする気は無さそうなのでいいでしょう」

スタスタと歩いて扉を開く桃白白

そこには長髪で、服に針を刺した男が立つていた

「なんだ、見つかっちゃつてたのか」

猫目のような顔をしたその男

「邪魔なんだよね。急ぎの仕事つてクロロから言われてるのに」

スッと針を取り出す

「ほう、私を桃白白とわかつても、やるつもりかね？」

構える桃白白

「あー、あの有名な。うちのじいさんがよく笑い話で出してたよ」

「ぐぐぐ…あのジジイめ。なら貴様はゾルディック家の者ということだな」

「まあ全員殺すからバラしてもいいか。そ、ボクはゾルディック家の

長男、イルミ」

その瞬間

シユツ!!

挨拶をして気が緩んだ隙をついたように針を投げるイルミ
「で、挨拶は終わりかな？」

イルミの投げた針を全て掴んでいた桃白白
「…じいさんの話と違うな」

ズオツ!!

オーラを爆発させるイルミ

「あのジジイが使う念、というやつか」

桃白白も気を上げる

（あのイルミで『1179』、そしてあの変なじいさんがあの有名な桃
白白…）

スカウターの数値は『634』

（そんなに高くはない。けどこの感じ…）

念とは違うようなこのオーラ

つい昨日も感じたもの

クラピカが使ったそれだ

（数値だけではわからない、か）

動き出した2人の動きに、ヒソカは静かに見守つた

シユシユシユシユ！

全方位から針が飛んで桃白白を襲う

キキキキンッ

弾き落とすものもあれば、当たつて弾かれるものもある
「どんな体してるのか」

イルミのその咳きに答えるように、桃白白は上着を脱ぐ

そこに見えたのは鋼の体

「そんな技術見たこともないんだけど」

「貴様らにはわかるまい」

ヒヨオ！

息を吸い込む桃白白

はつ！

発声と共に繰り出される拳
メキヨツ!!

避ける間もなくイルミの顔面を凹ませて吹き飛ばす
(…!見えたかった!)

吹き飛ばされた先で混乱するイルミ
「ただ拳を速く動かしただけにすぎん」

脱いだ服をパタパタとはたいて、机の上に畳んで置く
(依頼の失敗はあり得ない)

イルミは起き上がりつつ桃白白に攻撃を仕掛ける

(オーラの量はこつちが上のはずなのに!)

全てを捌かれていたとして返される

「まだまだ、甘い」

下蹴りを繰り出すイルミを、イルミの頭を掴んでジャンプで避ける

桃白白

そのままキュツ、と手首を動かしてイルミの首を曲げる

「あ…が…が…」

倒れ込んだイルミが針を投げる

キキン

弾いた針と、散らばった針がイルミに刺さる

「苦しまずに済むように、どどんぱで止めをさしてあげましょう」

ぼろつ、と手首を取る

そして気を高める

(桃白白の戦闘力が上がっていく…『933』)まで一瞬で戦闘力を
を変えられるのか…素晴らしい◆)

桃白白が腕をイルミに向けた瞬間

最後の力を絞つてイルミが特大の針を投げる

カンツ、と桃白白に弾かれたそれは、イルミの首に刺さり、今度こそ完全に沈黙する

気を静めて手首を付ける桃白白

「ふむ…さて、終わりましたぞ」

部屋で縮こまつっていた十老頭に声をかける

「さ…さすが先生!!」

わあっ、と歎声が上がる

「前金で50000万ゼニー頂いておりましたので、残りの50000万ゼニーの振り込みをお願いしますよ」

そう言われて慌ててパソコンを操作する十老頭の1人

「では、私の任務はこれで終わりで。最後にそこの者を火葬してあげましようかね。一応知り合いの孫のようすで」

そう言つてイルミに近寄ると

「待て、その者は晒し首にする」

十老頭の1人がそう告げる

「…昔の私だつたらどうしようが何も言ひませんでしたが、今の私はそういうことには賛同できないのですがね」

だが、それでも十老頭は首を縦には振らなかつた面子というものがあるのだろう

「ならば私はもう関与しないことにしましよう」

それだけ言うと桃白白はテラスに出る

そして柱の前に立ち、上と下を小突いて柱を取る

「聖地カリンは…この方角か」

ぶんつ!!!

シユツ!!

そして投げた柱に乗つて桃白白は消えていった

「所詮は表の殺し屋か。殺した相手をどうしようと構わないのがマフィアのやり方」

どんな晒し首にしようか、と十老頭がイルミの死体に振り向いたとき

「だ、誰だお前は！」

小さな子供がイルミの死体の横にいた
着物姿の子供

その子供がイルミの首から針を抜く
そして――

「ヨークシン セメタリービル地下」

ズズズズン

地響きと共に鳴り響いたのは機械音

ピピピピ

その音は暗殺完了の合図

「何を遊んでおったんじやイルミ」

『ごめんごめん、ちょっとやられちゃつてて』

ゼノに電話をしてきたのは、死んだはずのイルミ

「まさか桃白白のやつじやなかろうな」

『そ、知り合いなんだよね？ 教えてもらつてたよりだいぶ強かつたよ。今はカルトに起こしてもらつてなんとか、つて感じ』

『そうか、奴も鍛え上げておつたようじやの。この連絡をしてきたと

いうことは十老頭は始末できたのじやな？』

『全く勝てる気しなかつたよ。十老頭の方は抜かりなく。それよりボ

クの依頼者はまだ生きてる？』

そのとき、ガラガラ、と瓦礫を押し退けて立ち上がる者が一人

幻影旅団 団長クロロ

「ふん、ピンピンしとるわい」

苦々しげに言うと、ゼノはシルバを連れて帰つていった

「ふひいー、しんど。あれは盗めねえわ」

それだけ言うとクロロはバタリとその場に倒れ込んだ

【97】クラピカとの再会

～ベーチタクルホテル レストラン～

「あ！クラピカ！」

こつちこつち！と手を振るゴン

それに答えるように軽く右手だけ上げてクラピカはゴン達のいる

席へと座る

「久しぶりだね！」

「ああ」

「なんだよ、会えたの嬉しくないのかよ」

「いや、そういうわけではないんだ。すまない」

抑揚のない返事に口を尖らすキルア

「それにしても全員無事で良かつたぜ！」

それを宥めるようにまとめるレオリオ

「クラピカ、知つてつか？こいつらあの幻影旅団に捕まつて逃げてきたんだぜ？全然連絡ねえから心配してたら、心配してた以上の事してきやがる」

アハハ、と笑うゴンたち

「ねえ、クラピカどうしたの？」

「ああ、実は――」

そしてクラピカは話す

先程のヨークシンシティ襲撃は幻影旅団の仕業であること

そしてその幻影旅団たちは十老頭の指示により全員抹殺されたこと

死体も全て確認されていること

「私は…もう目的を失つた」

復讐に駆られて生きてきたクラピカ

その目的が一瞬で途絶えたいま、次に何をしていいかわからなくなっていた

「な、ならオレたちと――」

そうゴンが言いかけた瞬間

ピリリリリ

クラピカの携帯にメールが届く

“死体はフェイク”

その送り主はヒソカ

ガタツ、と立ち上がるクラピカ

「え?! どうしたのクラピカ!」

「…旅団の…死体は偽物…」

「偽物? どういうことだよ!」

矢継ぎ早にゴンとキルアから質問が飛ぶ

「とりあえず落ち着いて座ろうぜ」

レオリオがクラピカの手をとつて座らせる

「――ヒソカから連絡があつた。あの旅団の死体は偽物だそうだ。
：確かに旅団クラスの能力者ならそんなこともできるかもしれない」

クラピカの目にはまた光が灯っていた

「ならさー! クラピカも協力してよ! 旅団にオレたちも捕まつてさ。そ
のとき仲間の為に一生懸命なやつ、侍だつたけど、そういう人もいた
んだ! だからこんなことやめさせたいんだ!」

ゴンは身を乗り出してクラピカを説得する

「私も一度、旅団の一人と戦つている。そいつはクズだつたが。ただ、
私も倒すことはできず、相討ちとなつた」

それを聞いてキルアがピクッと耳を動かす

「相討ち? 旅団と?」

「ああ、冷静にやれば勝てたかもしれない」

眉をひそめるキルア

「なんで急にそんなに強くなつた?」

“制約と誓約”。自身にルールを課することで、念能力が上がる。そ
の分リスクも上がる

「例えば? クラピカは?」

「…私は”旅団以外にこの能力を使わない、使えば死”という制約と
誓約を立てている」

「そう言つて”束縛する中指の鎖”（チエーンジエイル）を見せる
「それつて…」

『言いよどむゴン

「そんな重大なことなんでオレたちに言うんだよ！」

キルアが立ち上がりつてクラピカに言う

「君たちを信頼しているから、かな」

恥ずかしげもなく言うクラピカに、少し照れたようにドサツと座り直すキルア

「で、具体的にやり方はあんのか？」

そう問い合わせるレオリオに、クラピカはかねてより考えていたことを告げる

「せめて旅団の頭、団長と呼ばれる男にこの鎖をかけられたら」
じやら、と小指の鎖を見せる

“律する小指の鎖”（ジャツジメントチエーン）

「これを刺して、念能力を使えば死ぬようにする。これで旅団の動きは止まるはずだ。できれば全員にかけることができればいいが…」

「団長1人だけ、つてならいけるかもしれないな」

そう返事をするキルア

「きつとできるよ！」

につっこり笑うゴン

「ありがとう、2人とも」

「あ！そうだ！ベジータさんたちにも協力してもらおうよ！悟空さんもいるし！」

そう言つてゴンが立ち上がると、レオリオがため息を吐く

「それがな、いねえんだよ。朝からずーっと。お前たちと連絡取れなくなつて、ヤバイと思つたから助けを求めに行つたんだがな」

「そつか…」

「ベジータさんに悟空さんもいたのか。あの2人の力が借りられないのは残念だが、旅団を止めるのは私の私怨だ。私一人でもやる」

そう宣言するクラピカ

「まあ悟空さんたち待つわけにもいかねーからな。早くしないと旅団

がヨークシン離れる可能性もあるし」
そのキルアの言葉にクラピカは頷き、
4人は作戦を練り始めた

【98】旅団を逃がすな

「ヨークシン郊外 幻影旅団アジト」
ヒソカは携帯を覗く

“団長との1対1を用意する”

目を見開くヒソカ

そのメールはクラピカから

続には、

“旅団をヨークシン中心街に誘い出して欲しい”
と、書かれていた

「そこが一番難しいんだけどね…◆」

ヒソカは見回す

旅団たちは大盛り上がりだ

特にノブナガは泣きながら喜んでいる

ウボオーギンが戻ってきたからだ

スタッフ、と腰かけていた手すりから降りて団長の元へ向かう

「どうした？ヒソカ」

「豚くんが逃げたこと言つとかなきや、と思つてね」

「ああ、ノブナガから聞いた。どこかでの垂れ死にしなければいいさ」

「変身能力は役に立ちそうかい？」

それとなく会話を続けるヒソカ

「…どうした？今日は珍しく話すじゃないか」

注意深くヒソカを見るクロロ

「どうせ自分が大暴れに参加しなかつたから気まずいんでしょ」

マチが冷たく言い放つ

「そりやねーんじやねーか？ヒソカはウボオーを助けに行ってくれて
たんだぜ」

珍しくヒソカを庇うノブナガ

「くくく、気まずいとかはないね◆せつかくだから団長の面白い能

力でも見せてもらえないかと思つてね」

「何か楽しい企みらしいな、フフツ」

クロロは、ヒソカが自分を狙っていることを知っていた
だからこそ、今回も念を出させて能力を解析するつもりだろう、と
考えていた

ならば戦闘には関係のないものを、と本を開くクロロ

「今日手に入れた能力なんだが——」

そしてクロロは占う

ノストラードファミリーのネオンから奪つた、100%当たる能力

で
そして——

「成る程……このまま残れば半分が死ぬ。だがここを去れば全員が死ぬ」

団員たちが読み上げた内容を聞いて、団長がそれを要約する
「そして気になるのはヒソカの文。『満月の下 暑の地で真っ赤な目
が虫を待つ』か。これは緋の目を持つ鎖野郎のこと。そして虫はオ
レたち。宴の地は、今日暴れたヨークシン中心。……そして今日が、満
月だ」

全員がクロロを見る

「今日ここで鎖野郎をやらないと、半分が死ぬ。ヨークシンを出れば
じわじわと全滅する。つまり、今から鎖野郎をやりにもう一度ヨーク
シン中心街へ向かう」

そう宣言して立ち上がるクロロ

ヒソカは服の中で携帯を打つ

“誘い出し完了”

「ビスカ森林公園」

「んじゃもう暗いしそろそろ帰つか」

悟空たちはあらかた食べ散らかしたところだった

「ちょうどいい暇潰しにはなつたな。明日にはグリーなんとかという
ゲームも届くことだしな」

バシュー、と氣で食べかすを燃やすベジータ

「楽しみだなー、悟天！」

「うん、早く帰ろ！」

「じゃあ競争だな！」

ドンツ！

「あ、ずるい！」

そう言つてドンツ！と追いかける悟天

「まだあいつら子供だなあ」

「ふんつ、カカロツト、貴様もあまり変わらんがな」

そう言いながら、悟空とベジータは食い散らかしたもののか片付けを

始めた

【99】確保と幕引き

（ヨークシン中心街）

『配置完了！』

『こつちもオッケー』

『オレの方も大丈夫だ』

ゴン、キルア、レオリオから返事が来る

作戦の要はクラピカ

「では手はず通りに…頼む」

中心街に旅団を誘い込み、ゴン達が隠れながら気配を出す
そして団長から団員を1人ずつ引き剥がす

団長の周りの人数が5人を下回つたら、クラピカがやる
ほぼ賭けに近かつた

だが、クラピカが団長さえ捕まえられればなんとかなる、と言い
張つて決まった作戦

不安が残る中、クラピカたちはベーチタクルホテルのそばで待ち伏
せる

待つこと10数分、壁走りしてくる集団が視界に映る

（来た！）

待ちきれずクラピカが殺氣を出してしまう

先頭のクロロ含め旅団全員の視線がクラピカへ向く

それに気づくゴンたち

だが旅団とクラピカの距離に対し遠すぎる

クラピカは鎖を出して応戦の構えを取る

旅団全員が鎖野郎だと認識して壁を蹴つて飛びすがる

旅団とクラピカがぶつかるその瞬間

ドゴオオオオオオオオン！！！

クロロ以外の後ろについてきていた団員が吹き飛ぶ

固まるクロロとクラピカ

後ろを気にしたクロロより、ほんの数瞬だけ早く動けたクラピカ

ジャラ！

“束縛する中指の鎖”（チエーンジエイル）！
ギュルルルルル！

巻き付いた鎖を締め上げるように引き上げて車に詰め込む
レオリオが運転する車は、ブレーキをかけることなく荒野を目指して走る

「何が起こった!?」

「わからない！」

レオリオの問いに語気荒く答えるクラピカ
ゴンとキルアは乗り込む暇がなかつた

（無事に逃げてくれているといいが…）

そうクラピカが思つたとき、クロロが口を開く
「鎖野郎がこんな優男だつたとはな」

くくつ、と笑うが、その表情が笑つていないこと事が透けて見える

「余裕がないのは貴様も同じだろう」

ギリツと鎖の締め付けを強める

「…一体何をした」

クロロは静かに尋ねる

「…こちらも…わからない」

「ふん、どうやら本当らしいな」

互いに何が起こつたかわからない

だが、いまはそんなことはどうでもいい

「レオリオ、この道の先にある荒野へ向かつてくれ」

そう言うと、クラピカはヒソカに落ち合う場所をメールする

♪ベーチタクルホテル前♪

ガラッ

瓦礫の中から人影が姿を表す

シユインシユインシユインシユイン

「いてててて」

ズズーーーン

大きな瓦礫を持ち上げて落とす

立つたのは金髪の子供

そこにもう1人の子供が飛んで降りる

「悟天するいよー！スーパーイヤ人は無しだろ！」

「えへへ、ごめんごめん」

「つたくもー」

そうしてるうちに砂ぼこりが薄くなつてくる

（あつ！）

（悟天逃げるぞ！）

ヒュン！ヒュン！

とにかく飛び上がつて雲の上に隠れる

そして2人が飛んでいったあと

ガラガラガラガラ

起き上がる団員たち

「何が起こつた…？」

フインクスが瓦礫を避けながら立ち上がる

「わからないあるね」

フェイタンは首を振つて砂ぼこりを落とす

「団長は…？」

マチが氣づいたように周りを見渡すが、姿はない

そしてパクノダやシズク、その他ほんどの団員がダメージを負つて立ち上がりざにいた

ウボオーの後ろにいたヒソカは奇跡的に無傷

そしてヒソカは携帯を見る

“ヨークシン外の荒野、昨日の場所”

とだけ書かれていた

どうやつて抜けるか思案していると、ウボオーが声をかけてくる

「お前はわかつてんだろ？誤魔化しとくから行けよ。その代わり携帯持つてるシャルにでも後で連絡入れといてくれや」

「きつちり借りを返してくれるとはね◆」

スウツ、と砂ぼこりに紛れて消える

その数秒後

「ウボオーは大丈夫?」

シャルやノブナガたちがやつてくる

「ヒソカのやつはどうした?」

「オレが動けないでいる間に団長を探しに行つた

そしてヒソカが動いた方と反対側を指す

「あつちか」

動ける団員たちはヒソカを追つて反対方向へと向かつて行つた

（ヨークシン外 荒野）

ズギュル！

クラピカはクロロの心臓に鎖を刺す

「この鎖はお前の心臓に刺さつてある。発動条件は――」

- ・団員との接触（会話含む）
- ・念能力の使用

「わかった」

それだけ言うと黙り込む

そこにヒソカがやつてくる

「本当にクロロを捕まえるなんてね◆しかもあの攻撃！まさか全てクラピカ、キミかい？」

ゾクゾクゾクツ、と身体を震わせながら近づくヒソカ

「あの爆発？は私ではない。逆に私が聞きたいくらいだ」

そしてクロロを置いてクラピカは車に乗り込む

「あとは好きにしたらいい」

そしてクラピカは去つていく

ヒソカはクロロを見る

もう待てない

背中の蜘蛛のマークを剥がし、クロロに言う

「団員の真似事は終わり◆さあ、やろう」

オーラを徐々に上げていくヒソカ

だが、クロロはそのまま無防備な状態で笑う

「団員じゃないなら話せるな。オレはいまあの鎖野郎のせいで念が使
えない」

そしてクロロは取引を持ちかける

“除念”と“タイマン”を取引に――

【100】そして誰もいなくなつた――』 9月4日

“

「ベーチタクルホテル フロント」

「うわあ…やつぱり酷いな」

「ボクたちのことバレてないよね?」

柱の影から壊れた入口を見るトランクスと悟天
そこにゴンたちがやつてくる

「おつ、帰つてきてるじゃねえか」

レオリオがトランクスと悟天の肩を叩く

「おはよ。オレたち今からレオリオが見つけてきた“グリードアイラ
ンドができるかもしない方法”を試しに行くところなんだ」

「まあレオリオにしちゃあいい方法見つけてきたと思うぜ?」

キルアまで太鼓判を押す

(トランクスくんどうする?待つてたらゲーム届くはずだけど…)
(でもこのホテルからは離れときたいよな…夕方までに戻ればいつ
か)

「ボクたちも行つていい?」

トランクスがゴンたちに尋ねる

「いいけどトランクスたちはゲーム届くんじゃないの?」

「あ、えーと、まずはパパたちがすると思うからさ。あ、あはははは
「ま、いんじやね?」

そう言うキルアたちに連れられて、トランクスと悟天はバツテラ氏
の館へ向かつた

「バツテラ氏 地下ホール」

「人がいっぱいいるな」

ざわざわと音が聞こえるほどの人

壇上に上がった男が説明を始める

「私はバッテラ氏に雇われたハンター、ツエズゲラ！今から一人一人テストをする！好きな順番で並べ」

ホールの横の扉を指すツエズゲラ

ザザザツ、とそれだけで人の列ができる

そして段々人が減つていき、残つたのはゴン、キルア、トランクス、

悟天

ゴンとキルアが先に向かう

そして最後になつたトランクスと悟天

「子供？まあいい。では、練を見せてもらおうか」

ツエズゲラがトランクスと悟天にそう告げる

「練つてなに？ゲームは？」

「念を知らないのか？話にならん」

「念なら知つてるけど…気でもいいの？」

トランクスが会話している間暇そうにする悟天

「キ？とりあえずキミたちの力がみたいということだな」

「なんだ、そんな簡単なことか。ほい」

バシュ

ドオオオオオオオオオン

氣を放つて壁に大穴を開けるトランクス

「そんなのでいいの？」

パアツ

ドオオオオオオオオオン

悟天も反対側の壁に大穴を開ける

「——ツ！『、合格だ！』

そして外に出てきたトランクスたち

「その様子じや合格したみたいだな」

キルアがニコニコの2人組を見てそう言う

「なんだ、結局4人とも合格か。いまからもうゲーム入るのか？」

「オレたちはそのつもり。レオリオはどうするの？」

「オレは医者の免許取るために国に帰るぜ。まあ悟空たちへの挨拶は

オレからしどくよ」

簡単な挨拶だけで帰つていくレオリオ

そして4人はバツテラ氏の邸宅の一番下、頑丈に守られた地下室へ行く

「誰が一番最初に入るか決めたか?」

ツエズゲラが合格者たちに尋ねる

「はいはい!ボクやる!」

「あ!トランクスくんずるい!」

躊躇なく立候補したトランクス、そして悟天が1、2番、そしてよくわからないپーハツトなどが続いた

そして――

トランクスがゲームに手をかざす

シユン

「消えた!」

驚く周囲

悟天も手をかざす

シユン

同じく消え去る

♪ベーチタクルホテル205号室♪

「あれ?ベジータ、悟天知らねえか?」

「ふつ、ちようどいい。届いたぞ」

部屋に入ってきた悟空にゲームを見せるベジータ

「おー!あのゲーム届いたんか!」

「2つセットのようでな。緑と赤がある」

赤い方を渡すベジータ

「どう違うんだ?」

「知らん。説明書には“持ったまま念を発動する”とだけ書いてあ

る

「氣でも大丈夫なんかな？んじゃ試しにやつてみつか
「おい！抜け駆けはするいぞ！」

ズオツ

同時に氣を発する2人

コンコン ガチャ

「悟空、ベジータ、いるか？」

そしてレオリオがドアを開けて見たものは
目の前でゲームの中に消えていく悟空とベジータ
ゴト ゴトッ

残されたのは2つのゲーム機

「なんだこれ…？ゲームボーイじやねえか！」
タイトルは”ポケモン グリーン&レッド”

♪ヨークシン中心街 カクテルバー♪

「あと何日働くのかな…」

ヨークシンに来てから掃除しかしてない男
そう、ヤムチャは取り残されていた